

松ヶ崎廃寺跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

松ヶ崎廃寺跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび京都市立松ヶ崎小学校増築工事に伴います松ヶ崎廃寺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

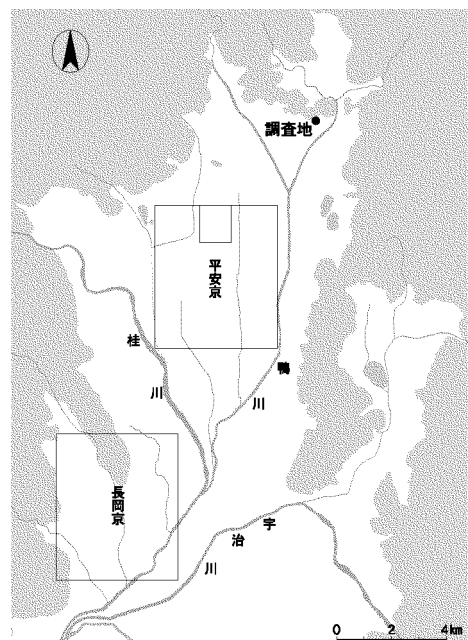
平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 松ヶ崎廃寺跡
- 2 調査地点所在地 京都市左京区松ヶ崎堀町40番地 市立松ヶ崎小学校
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2003年7月1日～2003年12月26日
- 5 調査面積 800m²
- 6 調査担当職員 布川豊治・丸川義広
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「松ヶ崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 土 壤 色 名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 本書掲載順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・担当職員
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 17 保存処理 竜子正彦・卜田健司
- 18 整理担当 布川豊治・丸川義広
- 19 本書作成 布川豊治・丸川義広
- 20 執筆分担 布川豊治：1、2、3 - (2)・(3)、4 - (1)・(2)・(4)、5
丸川義広：3 - (1)・(4)・(5)、4 - (3)、6
- 21 編集・調整 児玉光世・清藤玲子
- 22 妙泉寺絵図については、岩崎皓氏よりご教示いただいた。記して謝意を申し上げる。



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地の位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 既往の調査	4
3 . 遺 構	5
(1) 層 序	5
(2) 遺構の概要	8
(3) 1 区の遺構	8
1) 第 1 面	8
2) 第 2 面	10
3) 第 3 面	12
(4) 2 区の遺構	16
1) 第 1 面	16
2) 第 2 面	17
(5) 試掘区の遺構	19
4 . 遺 物	20
(1) 土器類	20
1) 縄文時代・古墳時代	20
2) 平安時代	21
3) 鎌倉時代から室町時代前期	21
4) 室町時代後期から江戸時代	21
(2) 瓦 類	23
(3) 石製品	25
(4) その他の遺物	29
5 . ま と め	32
6 . 付章 妙泉寺絵図について	35

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 1 区第 1 面遺構実測図 (1 : 150)
- 図版 2 遺構 1 区第 2 - 1 面遺構実測図 (1 : 150)
- 図版 3 遺構 1 区第 2 - 2 面遺構実測図 (1 : 150)
- 図版 4 遺構 1 区第 3 面遺構実測図 (1 : 150)
- 図版 5 遺構 2 区第 1 ・ 2 面遺構実測図 (1 : 100)
- 図版 6 遺構 試掘区遺構実測図 (1 : 80)
- 図版 7 遺構 1 1 区第 1 面南部遺構群 (北東から)
2 1 区土壇 67 (北から)
3 1 区墓 83 (北東から)
- 図版 8 遺構 1 1 区第 2 面全景 (北から)
2 1 区溝 65 (北から)
3 1 区第 2 面南部遺構群 (北から)
- 図版 9 遺構 1 1 区第 3 面全景 (北西から)
2 1 区礎石建物 (北から)
- 図版 10 遺構 1 1 区石列 162 ・ 163 と礎石 (北西から)
2 1 区第 3 面北拡張区 (南東から)
3 1 区第 3 面土器出土状況 (北西から)
- 図版 11 遺構 1 1 区礎石 5 の断ち割り状況 (南西から)
2 1 区礎石 6 (西から)
3 1 区礎石 1 の根固石 (北から)
4 1 区据付穴 143 ・ 159 (西から)
- 図版 12 遺構 1 2 区第 2 面全景 (北西から)
2 2 区景石 205 (西から)
- 図版 13 遺構 1 2 区池 206 新期洲浜 (北西から)
2 2 区池 206 新期洲浜の先端部 (北から)
- 図版 14 遺物 土器 1
- 図版 15 遺物 土器 2
- 図版 16 遺物 軒瓦 ・ 道具瓦 ・ 刻印瓦
- 図版 17 遺物 一石五輪塔 ・ 笠塔婆 ・ 石塔
- 図版 18 遺物 1 銭貨
2 金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 3	1 区調査前風景 (北西から)	3
図 4	1 区調査風景 (北から)	3
図 5	2 次調査で検出した石垣 (南から)	4
図 6	1 ・ 2 区土層断面図 (1 : 80)	6
図 7	溝64 ・ 65 ・ 82断面図 (1 : 40)	8
図 8	溝64 ・ 集石174実測図 (1 : 40)	9
図 9	墓74 ・ 83実測図 (1 : 20)	10
図 10	道路110 ・ 土壙103 ・ 柱穴列 1 実測図 (1 : 40)	11
図 11	土壙147実測図 (1 : 40)	12
図 12	土壙127実測図 (1 : 40)	12
図 13	礎石建物断割断面図 (1 : 40)	13
図 14	礎石建物実測図 (1 : 80)	14
図 15	土壙80実測図 (1 : 40)	15
図 16	土壙160 ・ 167実測図 (1 : 40)	15
図 17	土壙161実測図 (1 : 40)	15
図 18	土壙148実測図 (1 : 40)	15
図 19	土壙170 ・ 景石171実測図 (1 : 40)	16
図 20	石列201実測図 (1 : 40)	16
図 21	池206実測図 (1 : 60)	18
図 22	土器実測図 1 (1 : 4)	20
図 23	土器実測図 2 (1 : 4)	22
図 24	瓦拓影 ・ 実測図 (1 : 4、56 ・ 57は 1 : 2)	24
図 25	一石五輪塔 ・ 笠塔婆 ・ 石塔実測図 (1 : 5)	26
図 26	礎石実測図 (1 : 8)	28
図 27	銭貨拓影 (1 : 1)	29
図 28	金属製品実測図 (1 : 2)	30
図 29	木製品実測図 (1 : 4)	31
図 30	木製品	31
図 31	調査区西隣採取軒丸瓦拓影 ・ 実測図 (1 : 4)	32
図 32	調査区西隣採取軒丸瓦	32

図33	礎石建物と庭園遺構（1：200）	33
図34	2次調査と1区第2面および2区第1面遺構図（1：400）	34
図35	「寛政元年 妙泉寺絵図」	35
図36	「天保十四年 妙泉寺絵図」	37
図37	「嘉永三年 妙泉寺絵図」	37
図38	「松ヶ崎」『都名所図会』	40

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	21
表3	一石五輪塔一覧表	27
表4	銭貨一覧表	29
表5	釘類他一覧表	30
表6	妙泉寺絵図一覧表	39

松ヶ崎廃寺跡

1. 調査経過

京都市左京区松ヶ崎堀町40番地に所在する京都市立松ヶ崎小学校で、管理棟校舎老朽化による校舎の増築と新築工事が計画された。当地は松ヶ崎廃寺跡に推定されていることから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により発掘調査を実施することとなった。

調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当することになり、新校舎建設範囲を2期に分け、西半部分を1期調査（1区とする）として先行調査し、管理棟部分の東側を2期調査（2区とする）とする計画で開始した。

管理棟が使用中であることから、重機掘削の排土は運動場の隅に置くこととなり、そのための搬出路確保工事後、1区の調査を2003年7月4日から開始した。1区は管理棟校舎と北校舎の中庭に設定した調査区である。2次調査で検出した石垣の延長などの有無を確認することを目的とした。重機掘削のあと第1面の調査を行い、渡り廊下解体工事終了後の8月初頭に、調査区南側と東側を拡張した。その後、第2面の調査を行った。9月中旬、第2面下層の整地層を重機で排除し、第3面の調査を行った。この面で礎石建物1棟を検出したことから、京都市埋蔵文化財調査

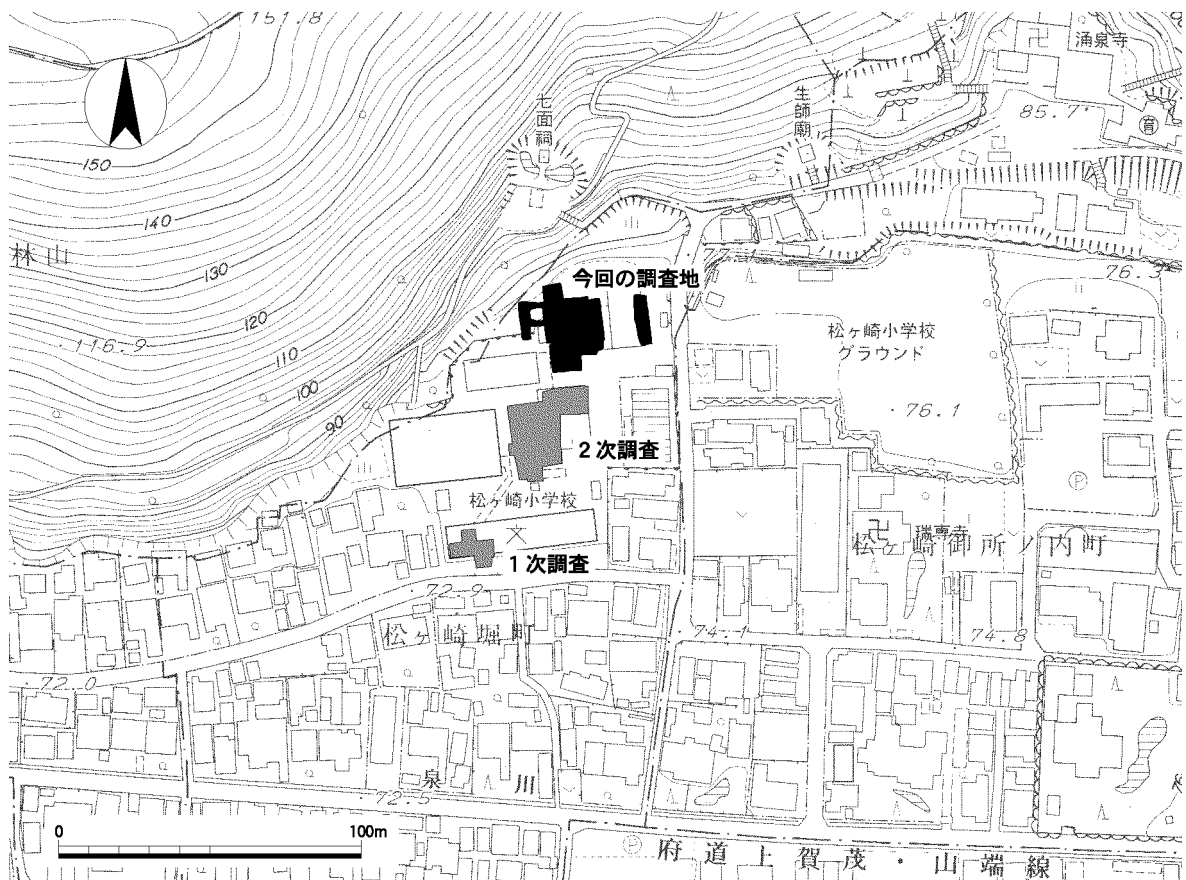


図1 調査位置図(1:2,500)

センターの指導により、その規模を確認するため、調査区の北側と西側の拡張を行った。また新築工事範囲内にあたる調査区西側の高まりを対象に10月後半から11月初旬に試掘調査（試掘区とする）した。1区の調査は、礎石建物の北端と西端を確認し、12月初めに終了した。

2区の調査は、管理棟解体後の11月12日から開始した。2区は管理棟の基礎跡が地表下約1.5mまであり、遺構の残存は望めないことから、管理棟の東側に設定した調査区である。1区で検出した池の東への延長を確認することを目的とした。重機掘削のあと、第1面の調査を行った。

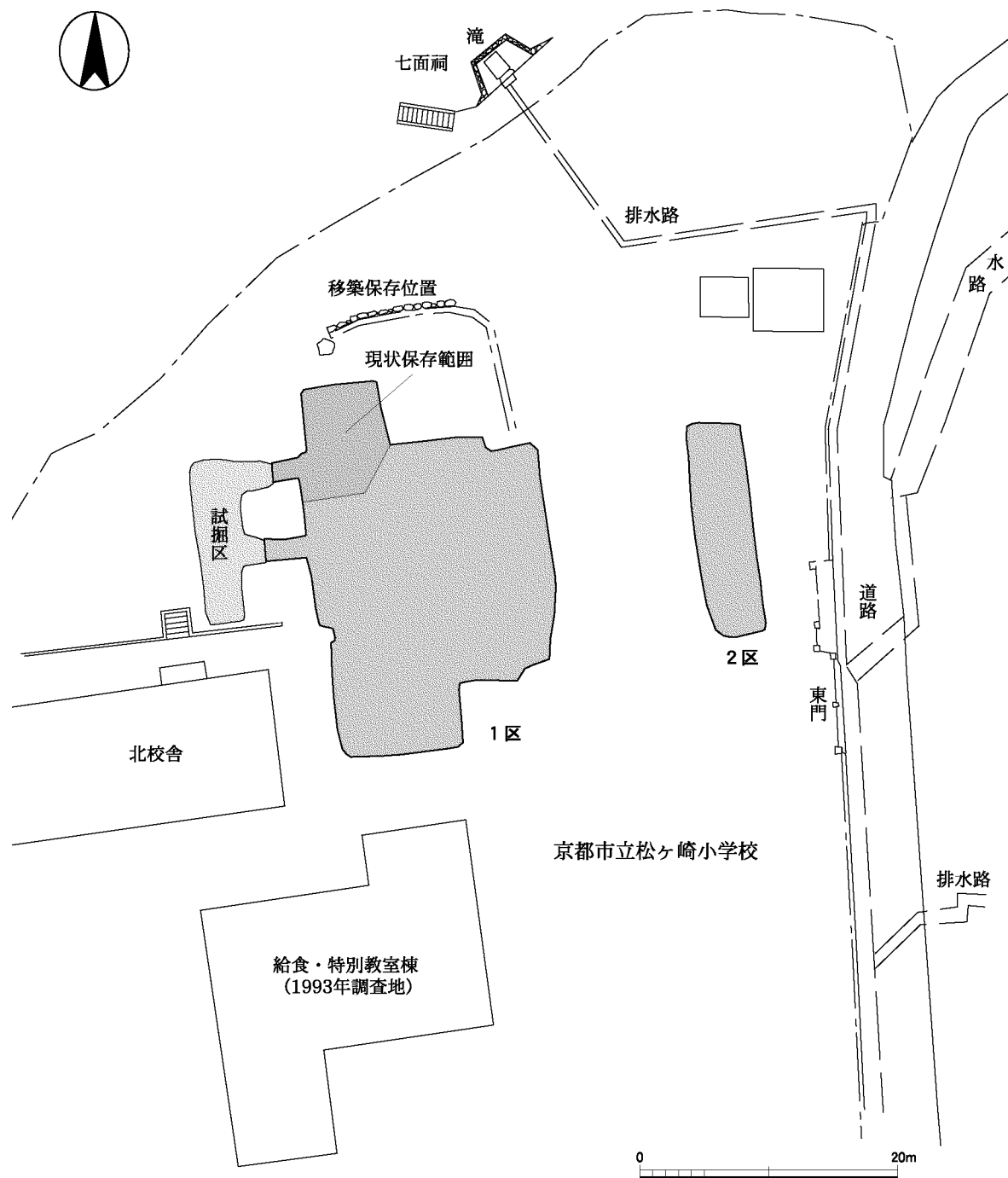


図2 調査区配置図（1：500）



図3 1区調査前風景（北西から）



図4 1区調査風景（北から）

その後、整地層を重機で掘り下げ、12月初めから第2面の調査を行った。この面からは、1m大の景石、遣水、洲浜を伴う庭園遺構を検出した。

そして調査区内の記録作業をすべて終え、12月22日より1区と2区の埋め戻し、排土置場であった運動場整備などを行い、26日に調査を終了した。

また、調査中の8月29日に、学校側の要請により地元向け説明会（参加者約20名）を行った。さらに礎石建物遺構の検出に伴って、10月30日に報道発表を、11月1日に現地説明会（参加者約150名）を、最後に庭園遺構の報道発表を12月12日に行い、この遺跡の普及に務めた。

なお、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、1区の礎石建物は、新築工事範囲外を現状保存すること、工事範囲内の礎石と、2区の庭園遺構の景石は移築保存することとなった。その作業は12月中旬より行った。現状保存作業は、礎石と据付穴、雨落溝を砂の土嚢で保護し、さらに厚さ約10cmの砂で覆ったのち、埋め戻した。移築保存作業は、礎石3基と石列を、1993年の調査で検出し、校地北端の山裾に移築した石垣の上に、2区の景石は、その横（西）に移築した。

2．調査地の位置と環境

（1）位置と環境

調査地は、京都盆地の北東に位置する松ヶ崎小学校敷地の北東部である。北は五山の送り火「妙」「法」がある山並がせまり、当地はその南裾に位置し、北から南へ緩やかに傾斜する。近辺には北の山中に七面祠が、北東には涌泉寺がある。また西には植物園北遺跡と上賀茂神社が、北東には松ヶ崎城跡や比叡山が、南西には下鴨神社などの史跡や遺跡がある。

松ヶ崎廃寺は、『日本紀略』正暦三年（992）6月8日の条にみられる「中納言源保光卿供養松ヶ崎寺、号円明寺」の松ヶ崎寺であると考えられている。後に歓喜寺と名を改め延暦寺の末寺となるが、徳治二年（1307）に当時の住職実眼が日蓮宗に改宗し、寺号も妙泉寺と改める。室町時代後期、天文五年（1536）の天文法華の乱では、延暦寺山門宗徒に攻められ松ヶ崎城と共に焼失したが、天正三年（1575）には再興された。その後、江戸時代を経て明治九年（1876）に寺域の一部¹⁾

が松ヶ崎小学校となり、大正七年（1918）には小学校に全敷地を譲り、その北東側にあった本涌寺と合併して現在の涌泉寺となった。また小学校は、市立小学校として同地に受け継がれている。

（２）既往の調査

松ヶ崎小学校敷地内で、当研究所は過去２回の発掘調査を実施しており、今回の調査は３次となる。１次調査は、昭和53年（1978）に校舎増築工事に伴い、校地南西部で実施し、室町時代後半から江戸時代にかけての柱穴・土壇・井戸などの遺構を検出した。遺物は土師器・陶磁器・銭貨・五輪塔などが出土した。しかし調査面積が120㎡と狭小なこともあり、検出した遺構と寺院との関連は明確にできなかった²⁾。２次調査は、平成５年（1993）中校舎（給食棟および特別教室棟）の新築工事に伴い、試掘調査を経て校地中央部で実施した。調査面積は488㎡で、室町時代後期から江戸時代にかけての石垣・石室・土壇・溝・井戸などを検出し、天文法華の乱の頃の土器や焼土、平安時代から江戸時代にかけての陶磁器・瓦類などが出土した³⁾。検出した石垣（図５）は、妙泉寺に関連する可能性が高いと判断され、一部が当校北端の山裾に移築保存された。



図５ ２次調査で検出した石垣（南から） 今回の調査地は右手奥

3 . 遺 構

(1) 層 序

調査地は山裾であるため、北から南に緩やかな傾斜をもつ。

1区(図6) 現地表は北西隅で標高75.3m、南壁付近で74.6mある。現代盛土は北側で厚さ0.4m、南側で厚さ0.6mある。北西部では白砂が2層ある。グラウンド整地のために入られた層とみられる。南壁のY=-19,604から同608付近では、地表下0.3~0.5mの範囲に路面の形成層が認められる。1層の厚さは0.05m前後あり、これが数層積み重なっており、層の上面には小礫が敷かれる。学校内の通路部分に盛られた層とみられる。同じ位置で地表下0.65~0.85mでも同様の路面層があり、こちらは道路110として検出したもので、妙泉寺(江戸時代)の通路の痕跡とみられる。

現代盛土下には、江戸時代から近代の整地層1が厚さ0.3~0.4mある。この下(地表下0.4~0.6m付近)には、にぶい黄褐色を呈する岩盤風化土を主体とした整地層2が1区の全域に堆積する。この整地層2は北端で厚さ0.3m、南壁で厚さ0.8mと、南側ほど厚い。整地層2上面で江戸時代の遺構を検出した。この整地層2は後述する礎石建物や池200を覆い、それらの整地を目的に入れられたとみられ、幾度かにわけて整地された痕跡が壁断面より窺える。天正期の妙泉寺再興より古い時期、16世紀後半以前と考えている。

1区西壁では、この整地層2の下に灰色泥土が厚さ0.1mほど堆積する。この層は礎石建物基壇西側の下りに堆積した泥土層であるが、土器が含まれており、礎石建物の廃絶時期を示す層である。

整地層2の下は、北半部では地山面となる。北東部の地山は明褐色砂礫層で、深さ0.6m(標高74.4m)にあり、地山面としては最も浅い。北壁の礎石建物に該当する箇所地山も、深さ0.65m(標高74.35m)で検出でき、前者に次いで浅い。この箇所の地山は、岩盤の風化土を主体とする明褐色砂泥層であり、前述した整地層2に類似する。礎石建物基壇はこの地山を削り込んだ上に構築されていたと考えられる。

1区南半には池200が広がる。池の堆積層は礫を含む黒褐色泥土層で、厚さ0.2~0.3mあり、標高73.0m付近に堆積する。池肩は、東壁ではX=-105,316付近にあり、南側・東側に広がる。東へは、2区で検出した池206に連続するとみられる。ただしこの池200の1区での範囲は、南東部付近に限られ、西半部には達しない。

地山面は北西から南東側に傾斜する。調査区南半では明褐色砂泥層上に褐色砂泥(混礫)層が堆積し、両者の境界は礎石建物の中央部にあり、明確に検出できた(図14)。この付近における地山面の標高は74.0m前後である。調査区南端での地山面の標高は、池200が存在するためさらに低く、標高72.8mとなる。

2区(図6) 東壁を中心に解説する。現地表から0.4mまで現代盛土であるが、その下は北半

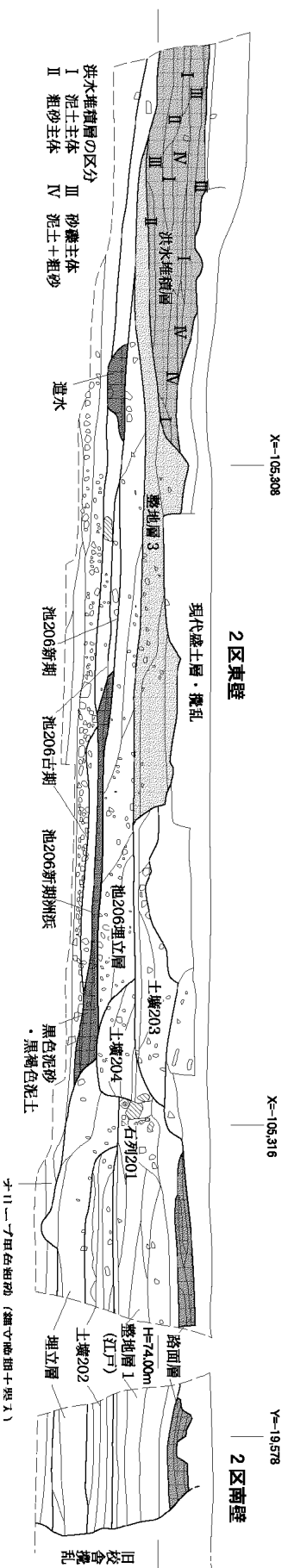
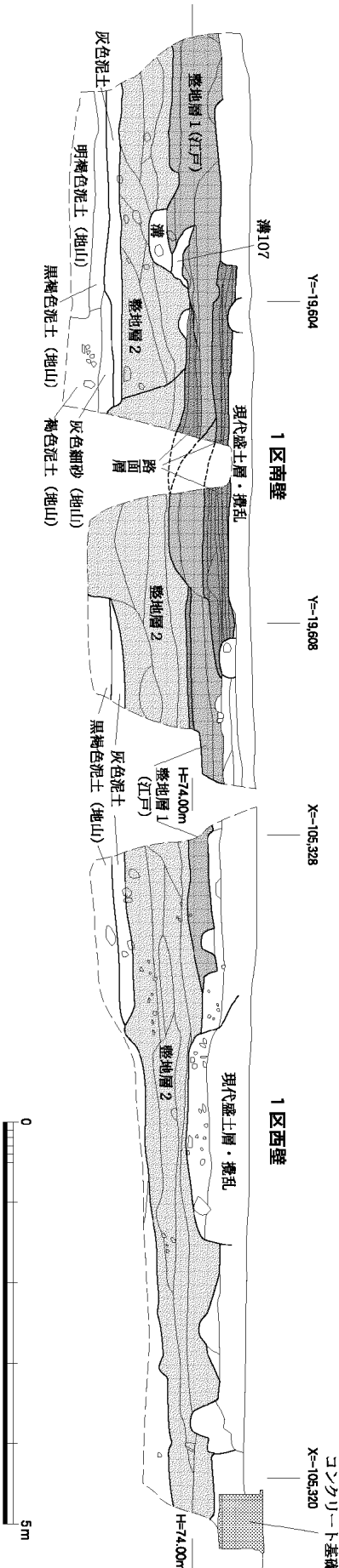
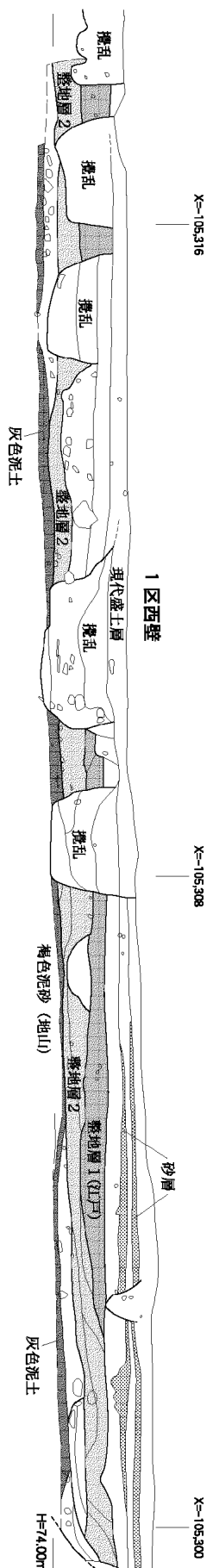


図6 1・2区西壁・南壁(1:80)

と南半で状況が異なる。南半では、X=-105,316以南に路面の形成層がみられる。厚さ0.05m前後で数層あり、全体で厚さ0.25mほどある。学校の東門から校内に出入りする通路の整地面とみられる。路面層の西延長は、1区南壁で検出したものに連続していたとみられる。北半では砂と泥の互層が厚さ0.6mほど堆積する。これらは山側からの流水で浸食されたのち堆積した、洪水堆積の跡とみられる。その南肩はX=-105,308付近にある。

それより南は、灰オリーブ色を呈する泥土を主体とした整地層3が厚さ0.5mほど堆積する。この整地層は、1区で検出した整地層2と同じものとみられる。この整地層3を掘り込んで土壌203が掘られ、土壌203の下には土壌204がある。土壌204の北肩は後述する池206を埋め立てた層から掘り込む。土壌203からは江戸時代前期、土壌204からは15～16世紀の遺物が出土している。

土壌203の下には池206を埋め立てた層が厚さ0.4mほどあり、その下が池206内堆積層となる。池206の底部は緩やかに南に傾斜する。池内の堆積層は2層に大別できる。傾斜の緩やかな箇所には池206新期の洲浜の小礫面があり、その上には黒色泥砂・黒褐色泥土が厚さ0.1～0.25m堆積する。新期洲浜の下層には黒褐色粗砂が堆積する。池206古期の堆積層である。池206内堆積層の下には、人頭大の礫が無造作に入れられたような状況がみられた。ただしこれらの礫は北側にも存在するため、全体が人為的な仕事であったかは結論が得られなかった。人頭大の礫が堆積する層の下にはオリーブ黒色粗砂層があり、ここからは縄文時代晩期の土器が少量出土した。湿地状の地形の堆積層とみられる。粗砂層の厚さは0.4m程度で、その下は固い砂礫層であった。

試掘区（図版6） 1区西側の高まりに設定した調査区である。南北調査区の西壁を中心に解説する。現地表は北端で標高77.2m、南端で76.1mである。現代盛土が厚さ0.5m前後あり、その下には、にぶい黄褐色泥土が厚さ0.3～0.5m堆積する。均質な泥土からなる整地層4で、1区で検出した整地層2と同じ層である。試掘区においては、この層の上面で顕著な遺構は確認できなかった。整地層4以下は自然堆積の層とみられる。山側では褐色の泥土層であったが、X=-105,308から同312付近では、25度前後の傾斜で南に下る堆積がみられた。自然堆積層は暗褐色粗砂中に

表1 遺構概要表

調査区	検出面	時期	遺構
1区	第1面	江戸時代後半	土壌、柱穴、溝、石組溝、墓
	第2面	桃山時代～江戸時代前半	土壌（集石を伴うものあり）、柱穴、溝、湿地状遺構、路面
	第3面	平安時代後期～室町時代後期	礎石建物、土壌、柱穴、池、庭石
2区	第1面	江戸時代	土壌、石列
	第2面	平安時代後期	庭園遺構、土壌、池
試掘区		江戸時代後半	石組溝

拳大の礫が大量に含まれており、山側の斜面が崩落、堆積したことがわかる。整地層4の東へのつながりであるが、北側東西調査区の北壁によると、最大で厚さ1.4mまで堆積し、1区の整地層2につながる状況がみられた。このことからすると、西側の高まりは当初から存在したが、段差はあまりなかったとみられること、それが整地された際に高まりを東側にせり出すかたちで盛り上げられ、現在みるような段差となったことなどが判明した。

(2) 遺構の概要

1区の調査では、整地層2上面で検出した遺構のうち、層位的には同じであるが、時期的に新しい群を第1面、より古い群を第2面とし、さらに第2面を第2-1面・第2-2面と新旧2時期にわけた。そして整地層2の下の礎石建物などを検出した面を第3面とした。地山直上である。

2区では、整地層3の上面で検出した遺構を第1面、整地層の下の面を第2面とした。第2面では庭園遺構を検出した。

試掘区は層序で述べたように、ほとんど遺構は検出せず、整地層4の下は、自然堆積層の地山になる。

(3) 1区の遺構

1) 第1面 (図版1・7)

土壌62 調査区中央部北寄りで検出した。南北約10m、東西約6m、深さ0.2~0.3mを測る浅い窪み状の遺構である。底部付近には、厚さ0.02m前後の炭や焼土が堆積していた。この土壌は火を燃やすために掘られた遺構であろう。土壌内からは、瓦、鉄製品、一石五輪塔などが投棄された状態で出土した。時期は、出土遺物から江戸時代末から明治初め頃と考えられる。

溝64 (図7・8) 調査区中央部北半で南北約12mにわたって検出した。北北西から南南東へ

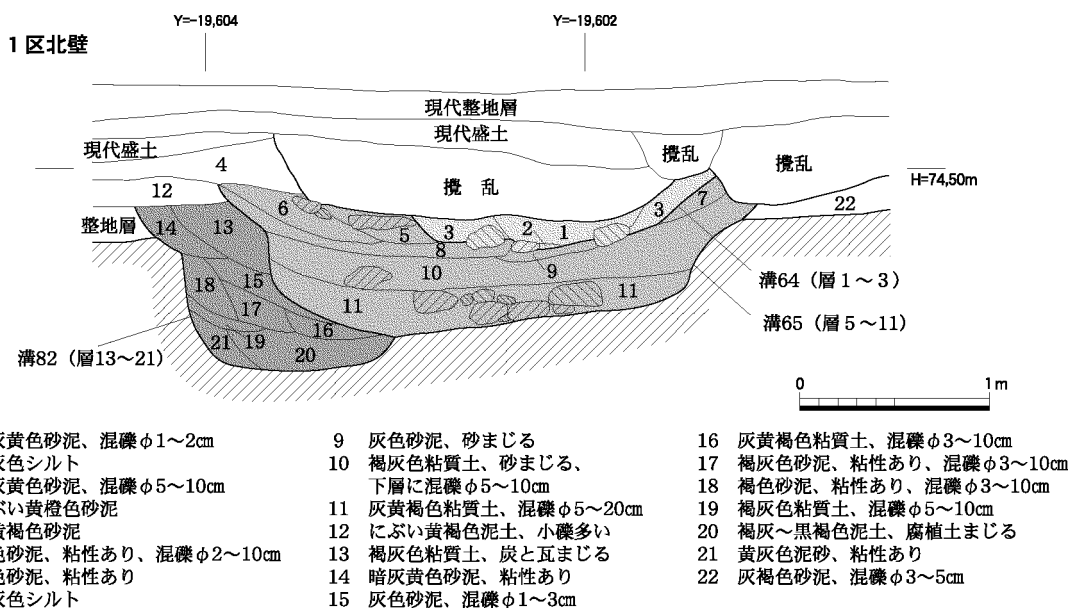


図7 溝64・65・82断面図(1:40)

流れる溝である。そのうち南側の約6mに石組護岸を検出し、石組部分は、幅約0.3m、深さ約0.3~0.4mの溝に仕上げられていた。石組護岸東側は、3段から4段ほどを丁寧に積み上げていたが、対岸の西側は一部のみしか検出できなかった。この溝は、断面観察などから全体に石組の護岸をされていたと思われる。溝の水流は、後述する湿地100へ流れ込んでいたと考えられ、溝南端の石組みなどの状況から、南端で東へ曲がり、流れ込んでいた時期があったと考えられる。溝内から18世紀初頭~19世紀の遺物が出土した。

また、この溝の南端で集石174を検出した。規模は、南北約1.2m、東西約1m、高さ約0.2mを測り、直径0.1~0.4m大の河原石を粗く並べたものである。溝64の水流が流れ落ちていたと考えられる。

なお、後述するが、この溝は溝65を踏襲したものと考えられる。

土壌67(図版7-2) 調査区南部で検出した、南北約9m、東西約2m、深さ0.4~0.7mを測る細長い土壌である。埋土の暗褐色砂泥層から人頭大の河原石に混じり、一石五輪塔や寄棟造り正面に唐破風を彫刻した石材が廃棄された状態で出土した。一石五輪塔などには、年号・題目・人名前などが認められた。この遺構の時期は、

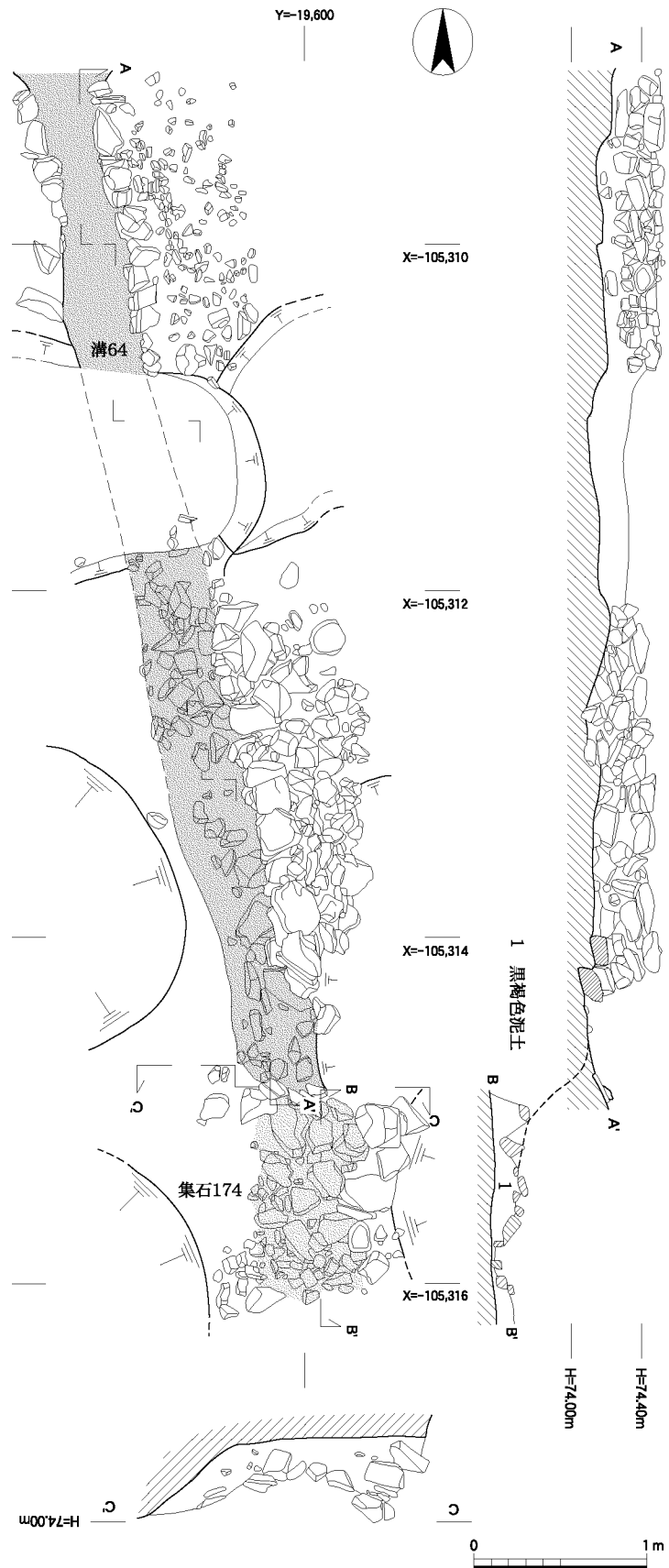


図8 溝64・集石174実測図(1:40)

出土遺物から18~19世紀と考えられる。

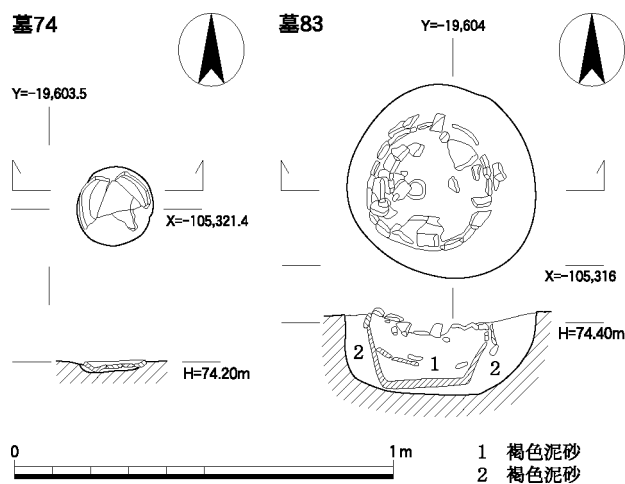


図9 墓74・83実測図(1:20)

墓70・74・83(図9) 後述する道路110の東側において検出した。南北方向に点在し、ほぼ直線上に北側から墓83、74、70の順に並ぶ。これらの時期は、江戸時代中期頃と考えられる。

墓83 土壌上部は削平されており、検出面での土壌規模は、直径約0.5m、深さ約0.2mを測る。土壌内部から土師質の蓋付壺が内側へ崩れ込んだ状態で出土した。壺は火消壺を転用したもので、壺内部には多量の炭と共に火葬骨が納められ、副

葬品と考えられる環状の銅製品が納められていた。

墓74 大半が削平されており、掘形底部のみ検出した。検出面での掘形規模は、直径約0.2m、深さ約0.05mであり、内部から蔵骨器と思われる壺が出土した。この壺は信楽の広口壺であろう。

墓70 土壌上部は削平され、掘形底部のみ検出した。検出面での掘形規模は、直径約0.3m、深さ約0.2mである。内部から蔵骨器と思われる土師質の火消壺破片が出土した。

2) 第2面(図版2・3・8)

第2-1面(図版2)

溝65(図8) 調査区中央部北半、溝64の下層で南北約13mを検出した。溝は素掘りで、幅1.8~2.5m、深さ約1mである。この溝は溝64の位置・方向など同一であることから、溝64は溝65を踏襲したものと考える。溝内から17世紀後半~18世紀前半の遺物が出土した。

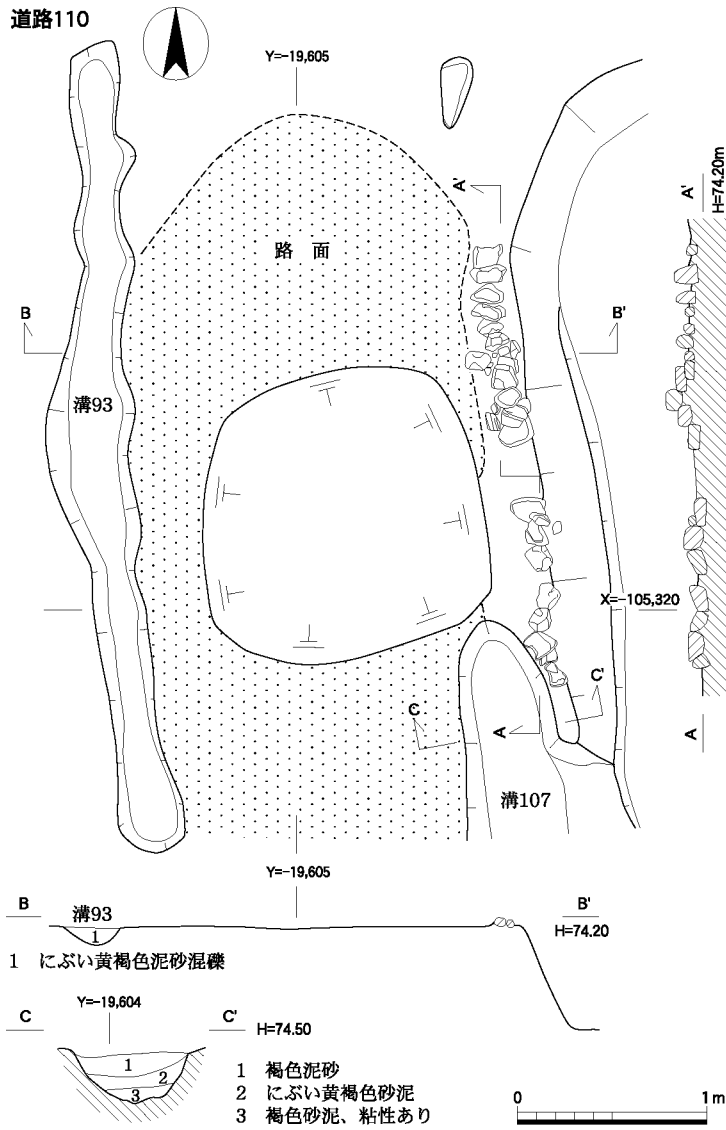
柱穴列1(図10) 溝65の東肩口で南北方向に4間分検出した。柱間寸法は一様ではなく、北側から順に1.2m、1.5m、2.3m、1.5mを測る。柱穴の規模は、直径0.2~0.5m、深さ0.1~0.25mであり、その中に柱痕を留めているものも見られた。柱穴列の方向が溝65とほぼ平行することから、溝に関連するものである可能性がある。

湿地100 溝65の南で検出した。湿地の北西部を東西約8m、南北約4.5mの範囲を調査したが全容は不明である。また溝64・65の水流は、この湿地に注ぎ込んでいたと考える。埋土は灰色泥土で、厚さ0.1m前後の堆積が見られた。湿地内からは16世紀後半から18世紀初頭の遺物が出土した。

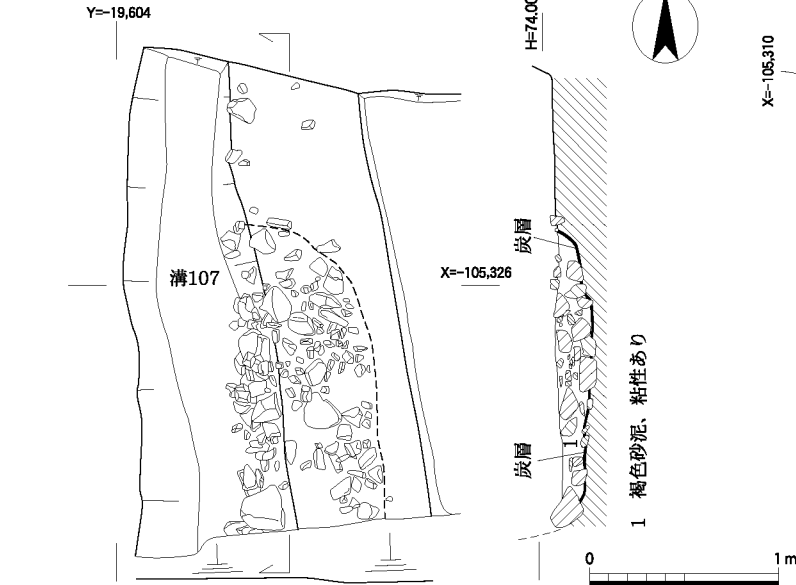
土壌103(図10) 調査区南部で検出した。0.05~0.2m大の河原石が詰まった集石遺構である。規模は、南北約1.6m、東西約0.7m、深さ約0.2mを測る。断面では掘形を示すとみられる薄い炭層を検出したが、平面では炭層の広がり確認できなかった。遺構の時期は、出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

なお、2次調査で検出したSX28(図34)は、この遺構の続きと思われる。

道路110



土壌103



柱穴列 1

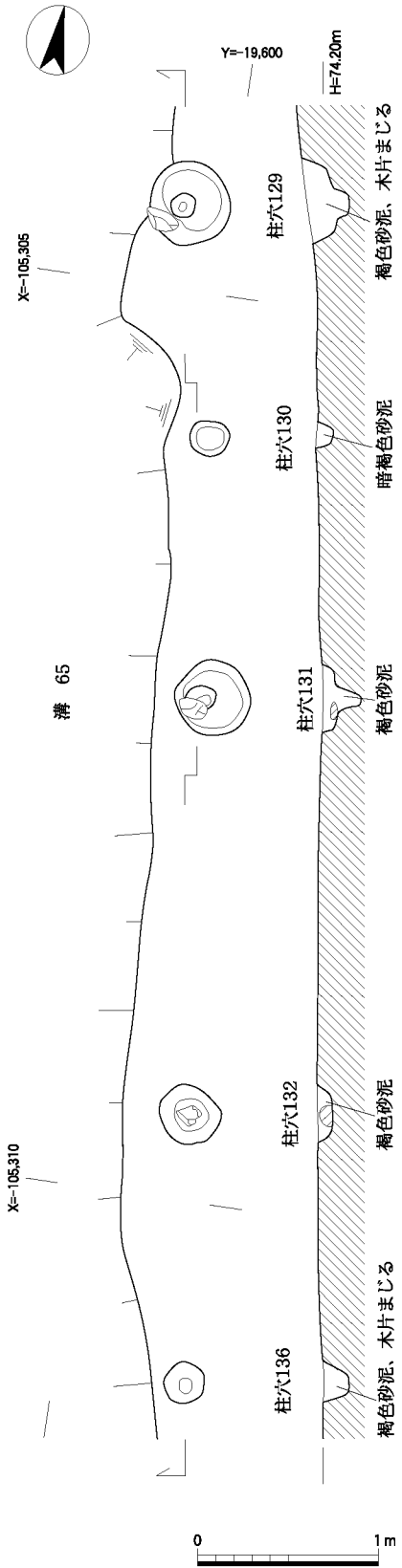


図10 道路110・土壌103・柱穴列1実測図(1:40)

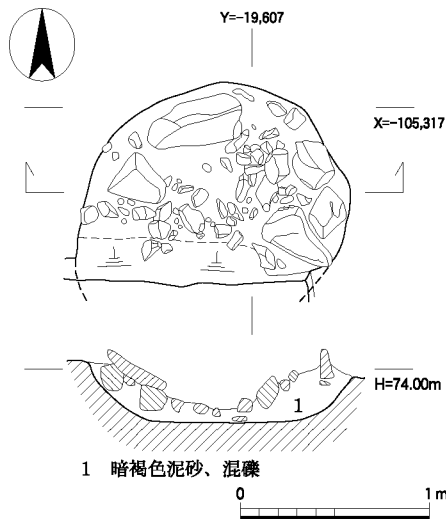


図11 土壌147実測図(1:40)

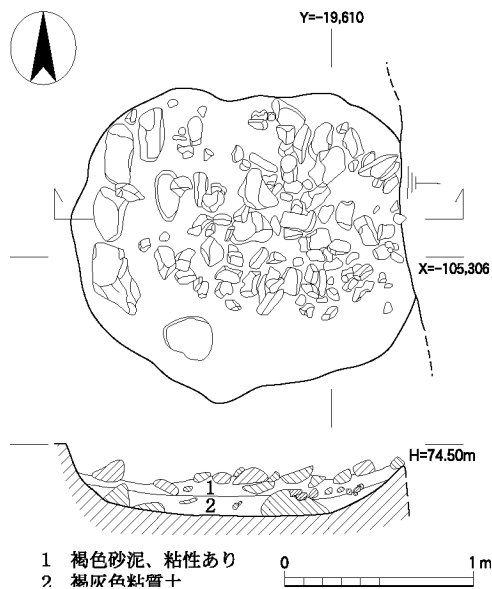


図12 土壌127実測図(1:40)

道路110(図10) 調査区南部で、南北方向の道路を約11mに渡って検出した。道幅約2mで、路面部分は堅く締まり、その上面には直径0.01~0.02mの砂利を敷き詰めていた。この道路は、何度も修復を行った痕跡(図6、1区南壁)を確認しており、長期間使用され続けたことが判明した。道路は地形に沿い、北から南に緩やかな勾配で傾斜しており、路面西側の溝93、東側の溝107は側溝の一部と考えている。また前述した墓70・74・83は、この道路に面して建立されていた可能性が極めて高い。道路は、江戸時代前期には機能していたと考えられる。

なお溝107北側の石列は、道路面に成立していたが、性格、時期などは明らかにできなかった。

土壌147(図11) 調査区中央部西寄りで見出した。遺構南半は調査区外であるため全容は明らかでないが、東西約1.5m、南北約1mを見出した。土壌の深さは約0.3mで、内部には直径0.05~0.5mの石が詰め込まれていた。形状や石の積み方などから、何らかの施設の根固めと思われる。出土遺物がないため詳細は不明であるが、層位関係から江戸時代前期と推定した。

第2-2面(図版3)

溝82(図8) 調査区中央部で見出した南北溝で、約14mほど調査した。溝は、幅1.5~1.9m、深さ0.7~0.9mを測るが、護岸を施さず素掘りのままである。

溝の方向はほぼ真北を向き、すぐ東側で見出した溝64、その下層の溝65とは方位を異にしている。また溝は、調査区南端で、土壌67や湿地100によって削平されているため詳細は不明である。しかしながら、2次調査との位置関係からすると、この溝はSD24(図34)に関連すると思われる。溝内からは16世紀後半の遺物が出土した。

土壌127(図12) 調査区北西部で見出した。掘形の規模は、東西約1.8m、南北約1.6m、深さ約0.3mである。内部に直径0.05~0.4mの石を詰め、外縁にはやや大きい石を据えている。何らかの根固め施設と考えられる。土壌内から、16世紀後半の遺物が出土した。

3) 第3面(図版4・9~11)

礎石建物(図13・14) 調査区北西部で、南北に約15m、東西に約6mにわたって見出した。

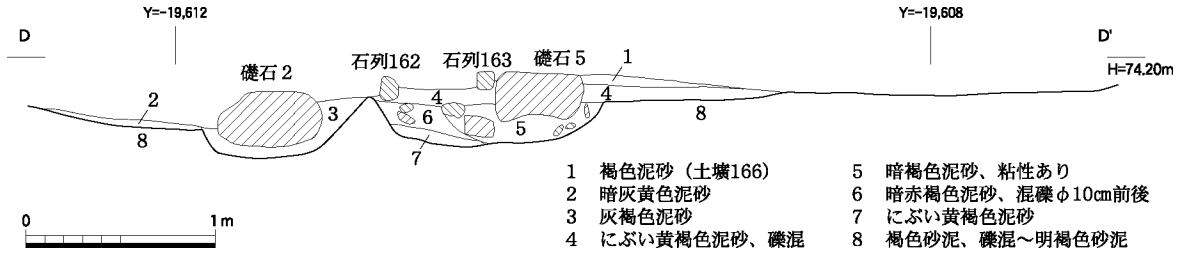


図13 礎石建物断割断面図（1：40）

建物全体の北西隅と、その南側にかけての一部が遺存していたにすぎなかったが、雨落ち溝や縁束礎石、側柱筋の礎石や据付穴などを検出した。これら以外の部分は、後世に削平を受けていた。そのため、全体の規模や間取り、向きなど、詳細については明らかにできなかった。

この建物は、低い段上（亀腹状か）に建立された礎石建物と考えられる。各柱間寸は以下の通りである。側柱筋については、建物北西角（据付穴150）と北辺側柱筋東一間目の礎石の据付穴151との寸法は、心々で約3m（10尺）である。また、西辺側柱筋の礎石心々間の寸法も同じく約3m（10尺）である。建物西辺の縁束礎石については、縁束北西の礎石7とその南の礎石6の寸法が約1.2m（4尺）、それより南の礎石6と礎石3、礎石3と礎石2、礎石2と礎石1、礎石1と据付穴143が、いずれも約3m（10尺）である。一方北辺では、礎石7と礎石8の寸法が約1.2m（4尺）、礎石8と据付穴153の寸法が約3m（10尺）である。

縁束礎石の外周には、長さ0.3～0.5m、幅0.2～0.3mの扁平な石を2条2列並べて雨落溝を作っている。雨落溝は、外側間で約1.2m、内法幅は約0.4mである。溝底には一切手を加えず、地肌が露出する。また北西隅には石が認められないが、これは山からの湧水などを流し込むためと考えられる。

雨落溝の建物側の石列は、縁束礎石と一体化して溝を形作っている。縁北西隅の礎石7は柱座が横向きに据えられており、礎石の据え直しがなされたことがわかる。

建物西辺の側柱筋の礎石と縁束礎石との間には、南北方向に縦長の石列（石列163）、狭間石が据えられている。また性格は明らかではないが、狭間石と同じような石列（石列162）が側柱筋の礎石列と縁束礎石列とのほぼ中間に据えられている。そしてこの石列を境にして縁束側が一段低くなる。

礎石は8石ほど遺存していたが、いずれも花崗岩で、礎石5以外は円形の柱座を造り出している。柱座の寸法は、いずれも直径約0.35m、高さ0.02～0.03mである。縁束礎石は、側柱筋の礎石と比較するとやや小振りであるが、造りは丁寧に仕上げられている。

なお、建物西側の縁束礎石列を覆う灰色泥土層からは16世紀前半の土師器が出土した。

柱穴169・172・173 掘形の直径0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mの柱穴状の遺構である。遺物は出土しなかったが、礎石建物と同一面で検出した。これらは、礎石建物建築時の足場用の柱穴である可能性が考えられる。

土壌66 調査区北東部で検出した。西側は溝65によって壊されている。土壌の規模は、東西約

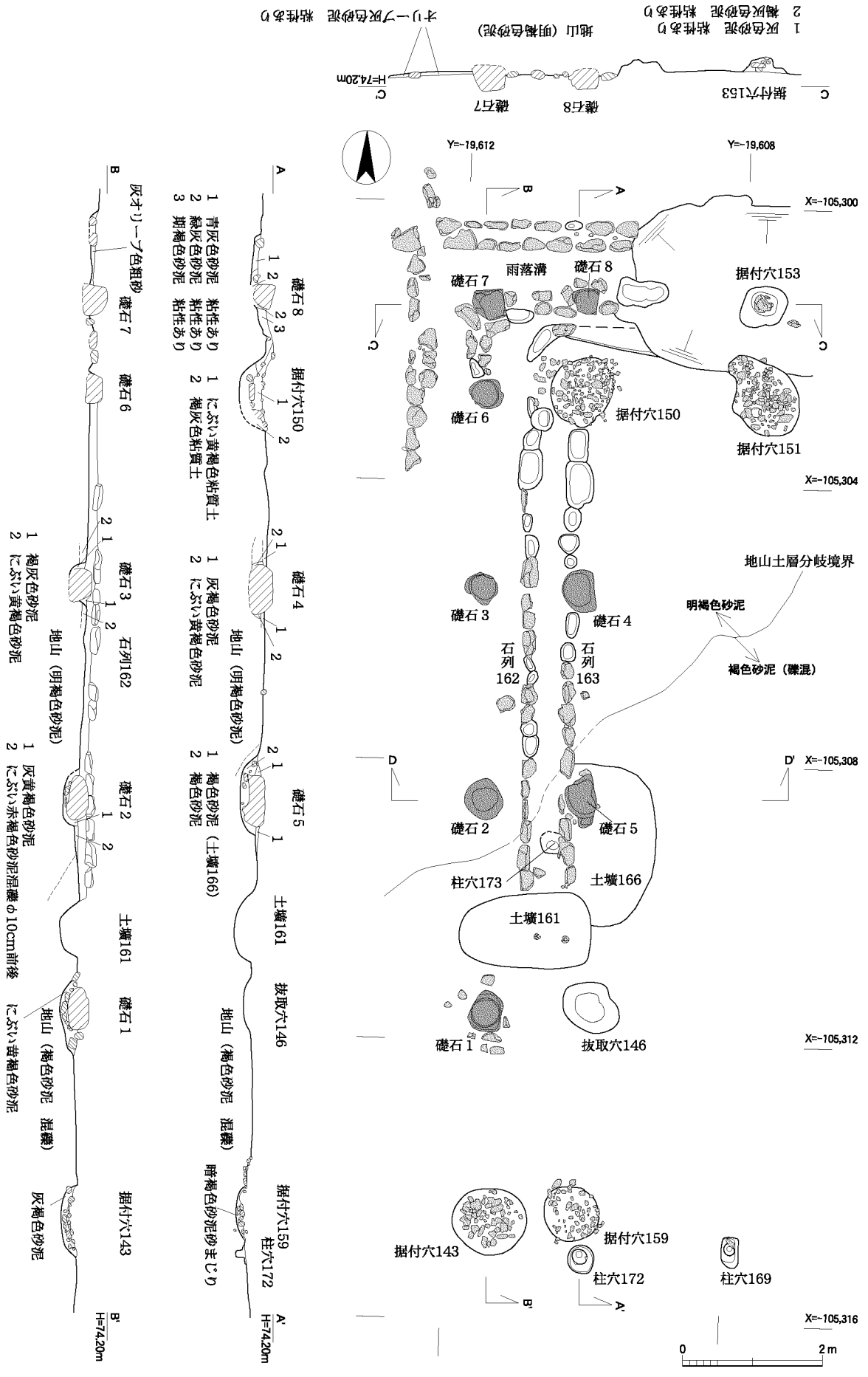


図14 礎石建物実測図 (1 : 80)

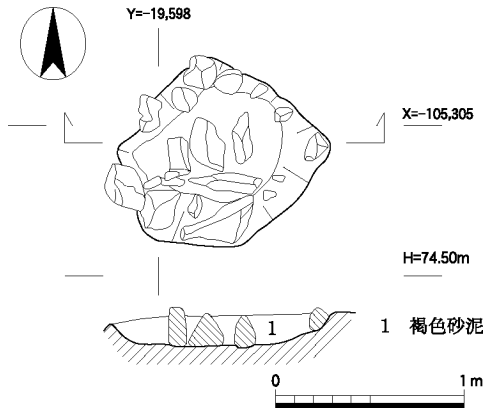


図15 土壌80実測図(1:40)

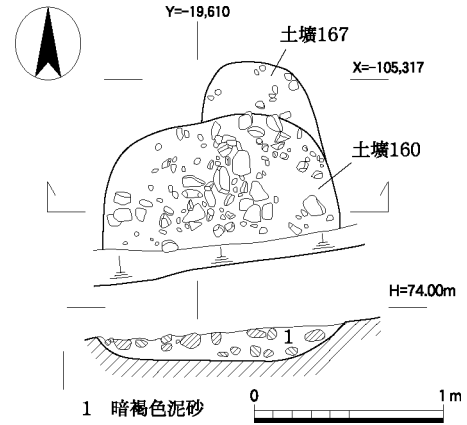


図16 土壌160・167実測図(1:40)

2.5m、南北約2.3m、深さは約0.2mである。埋土の黒色粘質土から11世紀末～12世紀初頭の土師器が出土した。

土壌80(図15) 調査区北東部で検出した。土壌の規模は、東西約1.1m、南北約1m、深さ約0.2mである。内部には直径0.05～0.5mの石を据えている。庭石などの据付穴と考えられる。

土壌160・167(図16) 調査区西部南寄りで検出した。土壌の規模は、東西約1.3m、南北約1m、深さ0.2mである。直径0.05～20mの石が土壌の全体に広がる。庭石の据付跡と考えられる。平安時代後期の土師器が1点出土した。

土壌161(図17) 調査区西部で検出した。土壌の規模は、東西約1.8m、南北約1m、深さ約0.4mである。石列162・163を壊しており、礎石建物より新しい。土壌内埋土から16世紀中頃の土師器と平安時代後期の軒丸瓦が出土した。

土壌166 礎石5の東側で検出した。土壌の規模は東西約1m、南北約2.3mであり、深さは約0.1mと浅い。礎石建物の基壇修復時の整地の痕跡と考えられる。土壌内埋土から鎌倉時代の遺物が出土した。

池200 調査区中央部南寄りで池の北岸の一部を検出した。池の汀は緩やかな勾配で、東西12m、南北5.5mにわたり検出した。埋土は黒褐色泥土層で、厚さ約0.2～0.3mほど堆積していた。

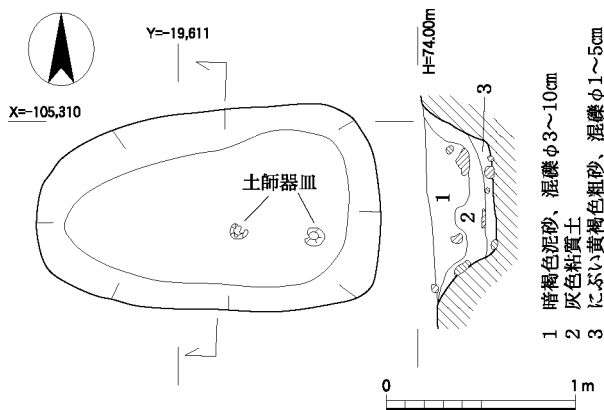


図17 土壌161実測図(1:40)

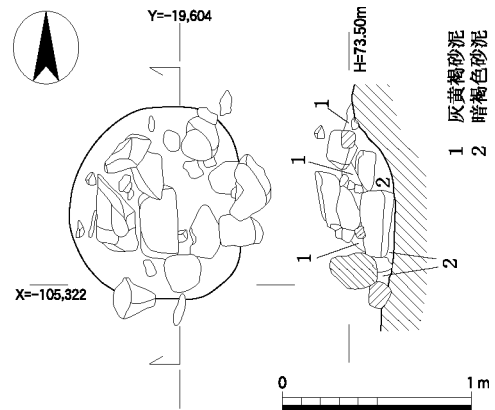


図18 土壌148実測図(1:40)

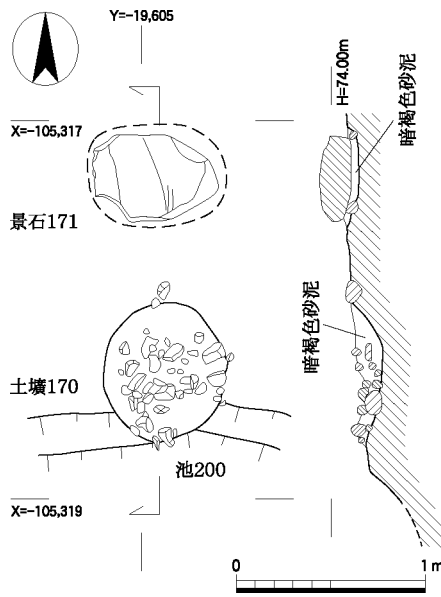


図19 土壌170・景石171実測図(1:40)

景石171(図19)池200の汀に据えられた小振りの庭石と思われる。石の寸法は、長さ約0.7m、幅約0.5m、厚さ約0.2mである。

(4) 2区の遺構

1) 第1面(図版5)

石列201、土壌202・203・204以外に顕著な遺構は見られなかった。

なお、調査区南端部で検出した泥土層(図21-7~10層)は、1区で調査した湿地100もしくは池200に関係すると考えている。しかしながら、検出した範囲が狭いこともあって両者の関係を具体的にすることができなかった。

石列201(図20) 調査区南端部で検出した。北東から南西方向の石組が1段のみ残る。石材は

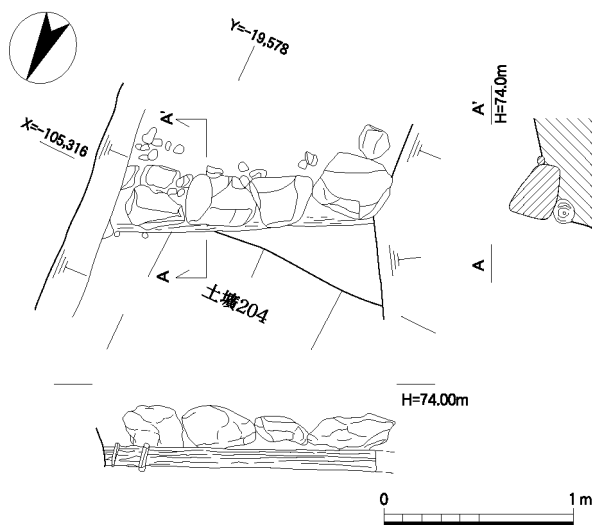


図20 石列201実測図(1:40)

0.3~0.4mの河原石が用いられ、平坦面を北に向けて据えられる。石材の下には直径0.1mの丸太が据わる。この丸太は石の加重を分散する目的で敷かれたものとみられる。丸太材の北側には固定のための小杭が2本残存する。石組は南側に掘形をもち、その掘形は江戸時代の整地層1を掘り込む。石列の向きが学校の東門の位置と合致すること、掘形埋土の上面に路面層があることなどから、東側から敷地内に入出入する通路の護岸用の石垣とみられる。江戸時代前期と考える。

土壌202 後述する池206が埋没して以後に掘られた浅い土壌である。深さ0.4mあり、埋土は黒褐色泥土を主体とし、中位には腐植土が堆積する。浅い湿地状の遺構の一部とみられるが、東西の溝である可能性も考えられる。唐津皿、曲物蓋などが出土し、江戸時代初め頃とみられる。

土壌203 整地層3を掘り込む。南北幅3.8m、深さは0.4mある。東西方向の溝状の遺構とみられるが、詳細は不明である。埋土はオリーブ褐色泥土に礫が混じり、底部の泥土中には腐植土が堆積する。土壌の時期は江戸時代前期である。

土壌204 土壌203の底部で検出した東西の溝状を呈する土壌である。幅1.5m、深さ0.45mあり、埋土は黒褐色を呈する砂泥で3層に分層できた。北肩は池206を埋め立てた層から掘り込む。前述した石列201は、この遺構に伴う護岸とも考えられる。室町時代後期の遺物が出土した。

2) 第2面(図版5・12・13)

第2面で検出したのは、平安時代後期に作庭された庭園遺構の一部である。この庭園遺構は、前述した礎石建物の東側に近接した位置にある。

池206(池200、図21) 調査区南側で池北岸の一部を検出したが、最低でも新旧2時期以上あったと考えられる。また前述した池200は、池206につながると考える。

古期の池 汀は北から南へ緩やかに傾斜する黒褐色泥砂層(20層)の上面に小礫混じりのにぶい黄褐色粗砂(18層)を客土して造成している。この時期の池岸は、玉石敷きの洲浜などは見られず、自然な状態に仕上げられていた。汀の勾配は2.5°前後と極めて緩やかである。池の水位は73.0~73.1mを測る。

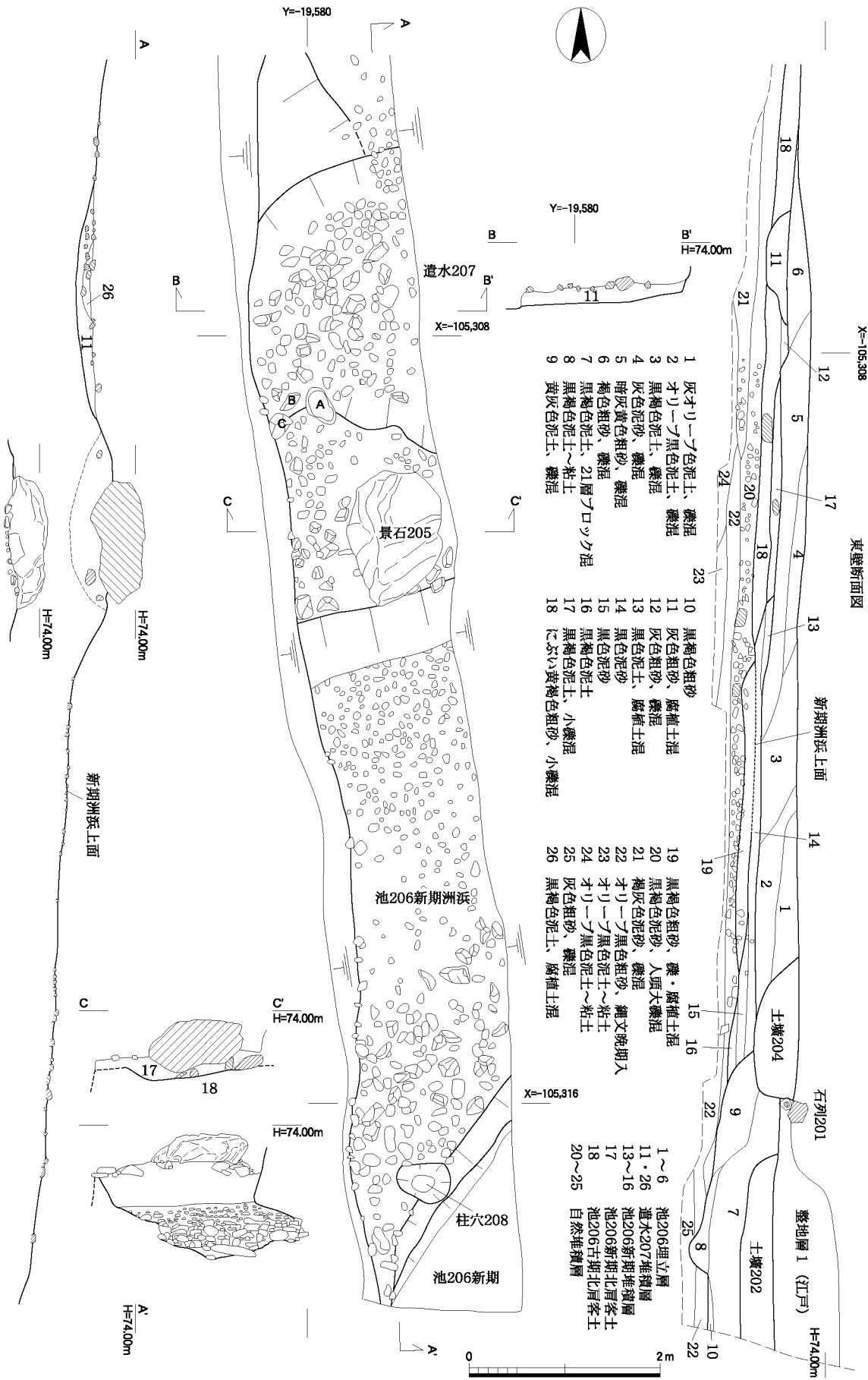
新期の池 古期の池堆積土の上面に玉石を敷きつめ、洲浜としている。陸部近くの玉石は、直径0.05~0.1mであるのに対して、岸から3~4mほど離れた所に使用されている河原石は、直径0.2~0.3mとやや大粒である。また、この時期、北岸には景石205が据付けられている。据付けにあたり、にぶい黄褐色粗砂(18層)の上部に黒褐色泥土(17層)を部分的に盛り上げている。黒褐色泥土層からは、11世紀中葉頃の遺物が出土した。

汀の勾配は、古期とほとんど変わっていない。新期の水位は73.1~73.2mを測る。

なお時期差のある池であるが、池内堆積土の状況からすると、汀近くの水深は深くても0.4m~0.5mと考えられる。

景石205 石の寸法は、長径1.4m、短径1.0m、高さ0.4mある。石はチャート製の角礫であるが、丸みをもつ形状は亀の甲羅に似る。底部には根固め石が入れられ、水平に据えるための仕事をしている。

遣水207 景石205の北側に接し、その規模は、幅2.5m、深さ0.15mである。北東から南西の方向をもち、池206汀線の方向と平行する。山側からの流水を池に流し込んでいたのであろう。内部には拳大の礫が入れられる。礫は磨滅した円礫である。埋土は黒褐色泥土(26層)で腐植土を含む。遣水の南岸にはやや大き目の石材が3個据えられる(図21-A・B・C)。小さいながら、これらは遣水に伴う景石であったとみられる。遣水207は池206古期、新期の両方に機能していた



池206実測図 (1:60)

であろう。

遣水207が掘り込まれた、にぶい黄褐色粗砂（18層）は池206の北肩を形成した層である。北壁では、この層から10世紀末頃の土師器が出土しており、池の形成時期を考える材料となりうる。また、池206の下に堆積する黒褐色泥砂（20層）は、池埋土との境界付近に人頭大の礫が大量に入れられた状況がみられた。礫は泥砂層上面に刺さったような状態でみられ、池206洲浜との境界も不鮮明であった。これらの礫が人工的に入れられたか判断に苦しんだが、断ち割りによって下層を調べた結果、北側においても立ち上がり部は検出できず、連続して堆積することが確認できたため、山側からの流水で運ばれた自然堆積層と考えることとした。

この20層の下層にあたるオリーブ黒色粗砂（22層）より縄文時代晩期の土器が3点（図22）出土した。付近に湿地状の地形が広がっていたことを想定させる。また縄文土器は、黒褐色粗砂（19層）からも1点出土しているが、こちらは池への再堆積と判断される。

（5）試掘区の遺構（図版6）

石組溝 X=-105,314付近で検出したもので、長さ2m以上、幅0.4m、深さ0.2mあり、北北東-西南西方向をもつ。両側に石を立て、上面には瓦を載せる。瓦は蓋として載せられたとみられる。江戸時代後期以後の排水施設の一部とみられる。

整地層4の下は自然堆積層であった。重機で地表下2.6mまで掘り下げ、層序の確認を行った。南北調査区西壁の観察によると、山側は褐色泥土を主体とする層（図版6の凡例）であったが、X=-105,308から同312付近では、暗褐色の粗砂主体の層（凡例）と拳大の礫を大量に含む層（凡例）が互層を呈する状態がみられた。これらは25度前後の傾斜をもち、南に下る堆積を示しており、山側斜面の土砂が崩落、堆積したものとみられる。

整地層4の東へのつながりについては、北側東西調査区の北壁では最大1.4mまで整地層が堆積し、それが1区の整地層2につながる状況がみられた。以上からすると、まず西側の高まりは地山の段階から存在し、その高低差は1.5mほどであった。戦国期から天正期には1区、試掘区とも整地層が入られ、段差は1.7mほどとなった。その際、高まりが東側にせり出すかたちで盛られたため、現在みるような明確な段差となって残ったことが判明した。

4. 遺物

遺物は、1区・2区・試掘区あわせて、整理箱で36箱出土した。瓦類は少なく、土器類が多い。時期的には、江戸時代の遺物が大半を占めるが、縄文時代、古墳時代、平安時代から江戸時代までの遺物が出土した。

土器類は、縄文土器、古墳時代の須恵器、土師器をはじめ、平安時代の遺物では、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が出土した。鎌倉時代から室町時代後期の遺物では、土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、輸入青磁、明染付磁器が出土した。桃山時代から江戸時代前期の遺物では、土師器、信楽陶器、美濃・瀬戸陶器、天目茶椀、国産染付磁器、白磁などが出土した。江戸時代後期の遺物では、土師器、京焼陶器（ミニチュア椀・仏飯器など）、唐津陶器、焼締陶器、国産の染付磁器、白磁、青磁が出土した。

瓦類は江戸時代のもものが大半を占める。平安時代では少数であるが、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦が出土した。室町時代では丸瓦、平瓦が少数出土した。桃山時代から江戸時代では、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、棧瓦、道具瓦などが出土した。

その他に石製品、銭貨、金属製品、木製品がある。

これらのうち、3章で記述した遺構からの出土遺物を中心に述べる。なお遺構名の1区・2区は必要な場合をのぞいて省略した。また土師器の年代については、平安京・京都～戦国編年に準拠した⁴⁾。

(1) 土器類 (図版14・15、図22・23)

1) 縄文時代・古墳時代 (図22)

(1～4)は縄文時代晩期の土器である。(1)は据付穴143の根固石の間から出土したもので、その厚みから口縁部に近い部位とみられる。磨滅が激しいが条痕が残る。(2)は2区の自然堆積層の中から出土した。磨滅が激しく表面には技法の痕跡が認められない。(3)も2区の自然堆積層の中から出土し、磨滅が激しいが、胎土などから縄文時代の土器と判断した。(4)は池206埋土から出土した。深鉢の底部とみられる。

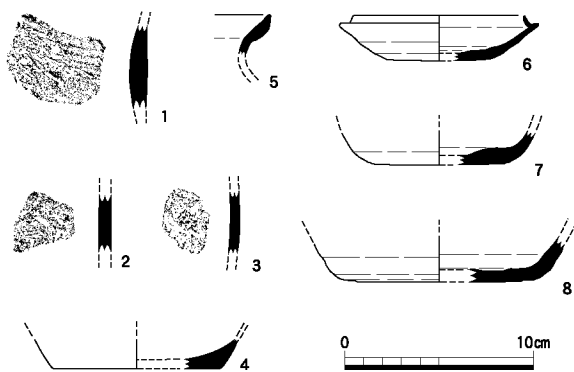


図22 土器実測図1 (1:4)

古墳時代の土器は5点出土した。そのうちの図化困難なものは省いた。(5)は1区の南部の攪乱底部(池200もしくは整地層2にあたる)から出土した土師器であり、受け口状の甕の口縁部である。小片であるため明確ではないが、古墳時代前半のものであろう。(6～8)は須恵器の杯身で、7世紀代のものである。出土地点は、(6)が溝64の裏込めから、(7)が池206の上面か

ら、(8)が池206を造成した18層北部からの出土である。

2) 平安時代(図23)

土壌66(9~11)は土師器皿である。口縁部をナデて、外反する。～期古段階に属する。

池206(12)は土師器皿で、～期古段階に属する。(13)は灰釉陶器椀である。内面に重焼の痕跡が残る。東海産と推定する。10世紀末~11世紀前半のものである。

池200(14)は土師器大型皿で、～期に属する。

3) 鎌倉時代から室町時代前期(図23)

礎石上面(15)は白色土器高杯である。礎石を覆う層から、16世紀の土師器皿、瓦器羽釜などに混じり出土した。12世紀後半のものである。

土壌166(16~18)は中型から大型の土師器皿である。体部が外反化する。～期中~古段階に属する。

4) 室町時代後期から江戸時代(図23)

灰色泥土層 完形品を含む残存状態の良いものが数点出土した。(19・20)は小型、(21~23)は大型の土師器皿である。(21・22)はほぼ完形である。～期に属する。

土壌161(24)は土師器皿である。～期に属する。

溝82(25~27)は土師器皿である。～期中段階に属する。(28)は信楽播鉢である。幅約1.5cmの4本1単位の播り目が、体部内面の口縁部から底部まで伸びる。播り目の間隔は一定ではな

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ・古墳時代	縄文土器 土師器、須恵器	1箱	縄文土器4点 土師器1点、須恵器3点	0箱	0箱
平安時代 ~室町時代	土師器、黒色土器、白色土器、 瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑 釉陶器、施釉陶器、焼締陶器、 輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、 丸瓦、平瓦、金属製品、木製 品	5箱	土師器23点、灰釉陶器1点、白 色土器1点、焼締陶器2点、輸 入陶磁器1点、軒丸瓦2点、軒 平瓦1点、金属製品10点、漆器 2点	2箱	1箱
桃山時代 ~江戸時代	土師器、焼塩壺、土製品、施 釉陶器、焼締陶器、染付陶磁 器、平瓦、丸瓦、棧瓦、軒丸 瓦、巴文瓦、軒平瓦、道具瓦、 鬼瓦、刻印瓦、金属製品、石 製品、木製品	31箱	土師器5点、焼塩壺1点、施釉 陶器2点、染付陶磁器1点、軒 丸瓦1点、巴文瓦1点、軒平瓦 3点、道具瓦1点、鬼瓦1点、 刻印瓦2点、一石五輪塔8点、 墓石3点、寛永通寶7点、金属 製品2点、木製品3点	12箱	11箱
合計		37箱	92点(11箱)	14箱	12箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くになっている。

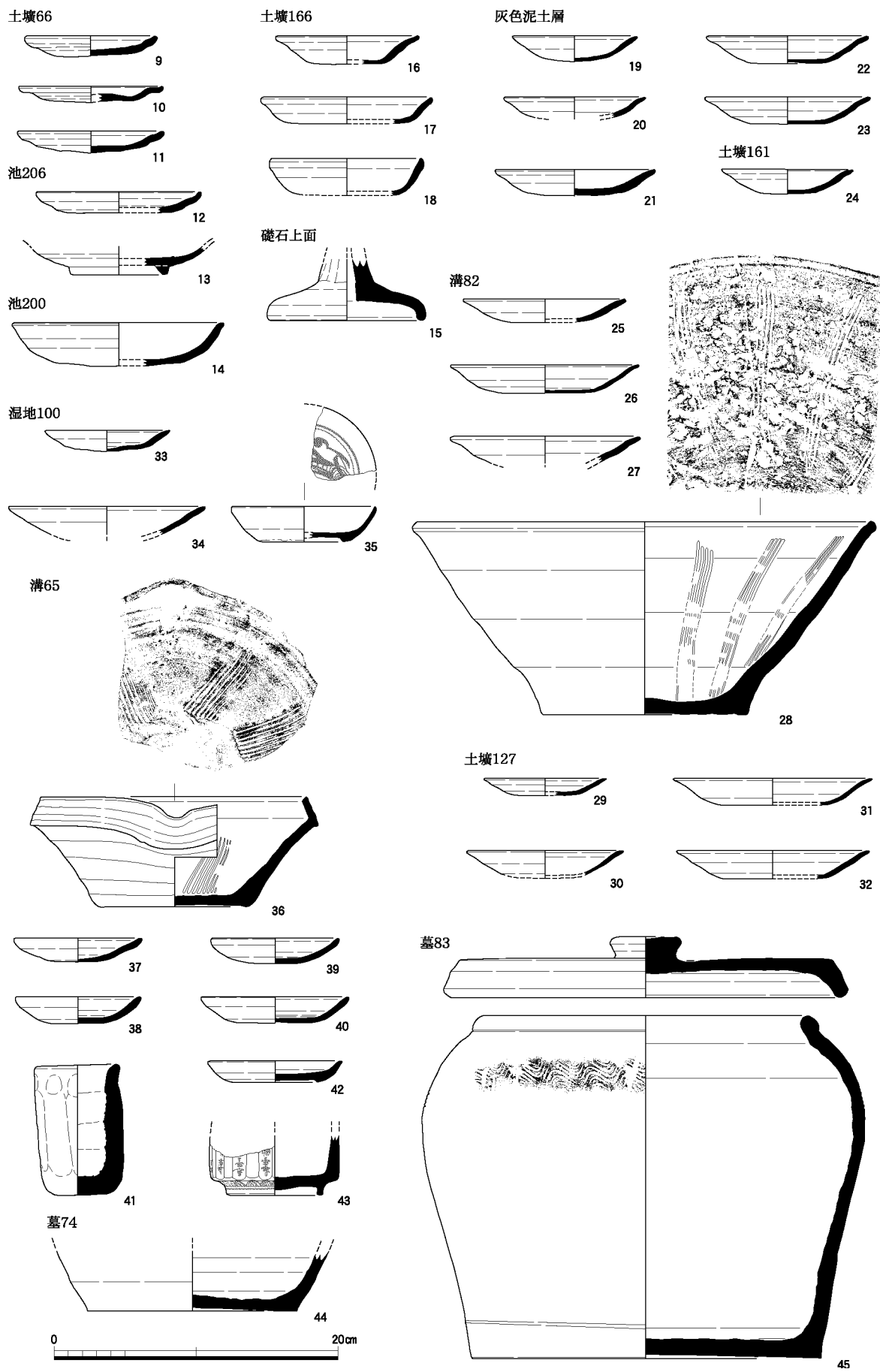


图23 土器実測図2 (1 : 4)

く、全体で推定16～17単位である。内面に使用痕がある。16世紀後半のものである。

土壙127 (29)は小型の土師器皿、(30～32)は大型の土師器皿である。内面底部周縁の圏線は不明瞭である。期中～新段階に属する。

湿地100 (33・34)は土師器皿で、期中～新段階に属する。(35)は輸入陶磁器の明染付で、16世紀のものと思われる。この遺構の埋土からは、他に中期に属する土師器皿などの遺物が出土している。

溝65 (36)は備前播鉢である。指押さえで注ぎ口を作る。幅2.5cm前後の8本1単位の播り目が、体部内面の中位から底部まで伸びる。播り目の間隔は一定ではなく全体で推定6単位である。16世紀代のものと考えられる。(37～39)は土師器大皿である。(40)は土師器の大皿で、内面底部に不明瞭な圏線がある。いずれも中期に属する。(41)は焼塩壺の完形品である。(42)は美濃・瀬戸の施釉陶器皿である。(43)は初期伊万里染付である。いずれも17世紀前半のものと考えられる。

墓74 (44)は信楽の鉄釉広口壺底部である。江戸時代中期のものである。

墓83 (45)は土師器の火消壺で、蓋が付く。体部外面の上部に、ロク口の回転を利用して付けたと考えられる6本の掻き目、波状の文様がある。江戸時代中期のものである。

(2) 瓦類 (図版16、図24)

軒丸瓦 (46)は土壙161から、(47)は礎石建物の西側、灰色泥土層から出土した、平安時代後期のものである。栗栖野瓦窯に同范と思われるものがある⁵⁾。(48)は石列201の南側の整地層1から出土したものである。瓦当部に「妙」銘がある。妙泉寺の「妙」であろう。江戸時代前期のものとする。(49)は1区北西部の礎石建物を覆う土層から出土したものである。三巴文で獅子口につくと思われ、桃山時代のものとする。

軒平瓦 (50)は2区の厚い整地層3から出土したもので、半折り曲げ成型である。平安時代後期のものであり、山城産⁶⁾と考える。(51)は溝65埋土下層から出土したもので、平瓦との接合部の瓦当裏にヘラ切痕がある。桃山時代から江戸時代初期のものとする。(52)は湿地100から、(53)は1区南東部第1面から出土した。この2つは銀いぶしであり、表面は金雲母が目立つ。江戸時代中期以降のものである。

道具瓦・鬼瓦 (54)は土壙202から出土した道具瓦である。大棟に使用する棟瓦と思われる。桃山時代から江戸時代初期のものと思われる。

(55)は溝64の裏込めから出土した鬼瓦である。桃山時代から江戸時代初期のものと思われる。

刻印瓦 (56)は土壙62から出土した丸瓦である。凸面に幅1.5cm前後、長さ3.2cm以上の隅丸方形の中に、陰刻で「御用、大佛瓦師、蒼埜四郎」と刻印する。(57)は1区の第1面から出土した。無文軒平瓦の瓦当面に、幅1.2cm前後、長さ3cm以上の長方形の中に陰刻で「川口 吉政」と思われるものを刻印する。江戸時代後半のものである。

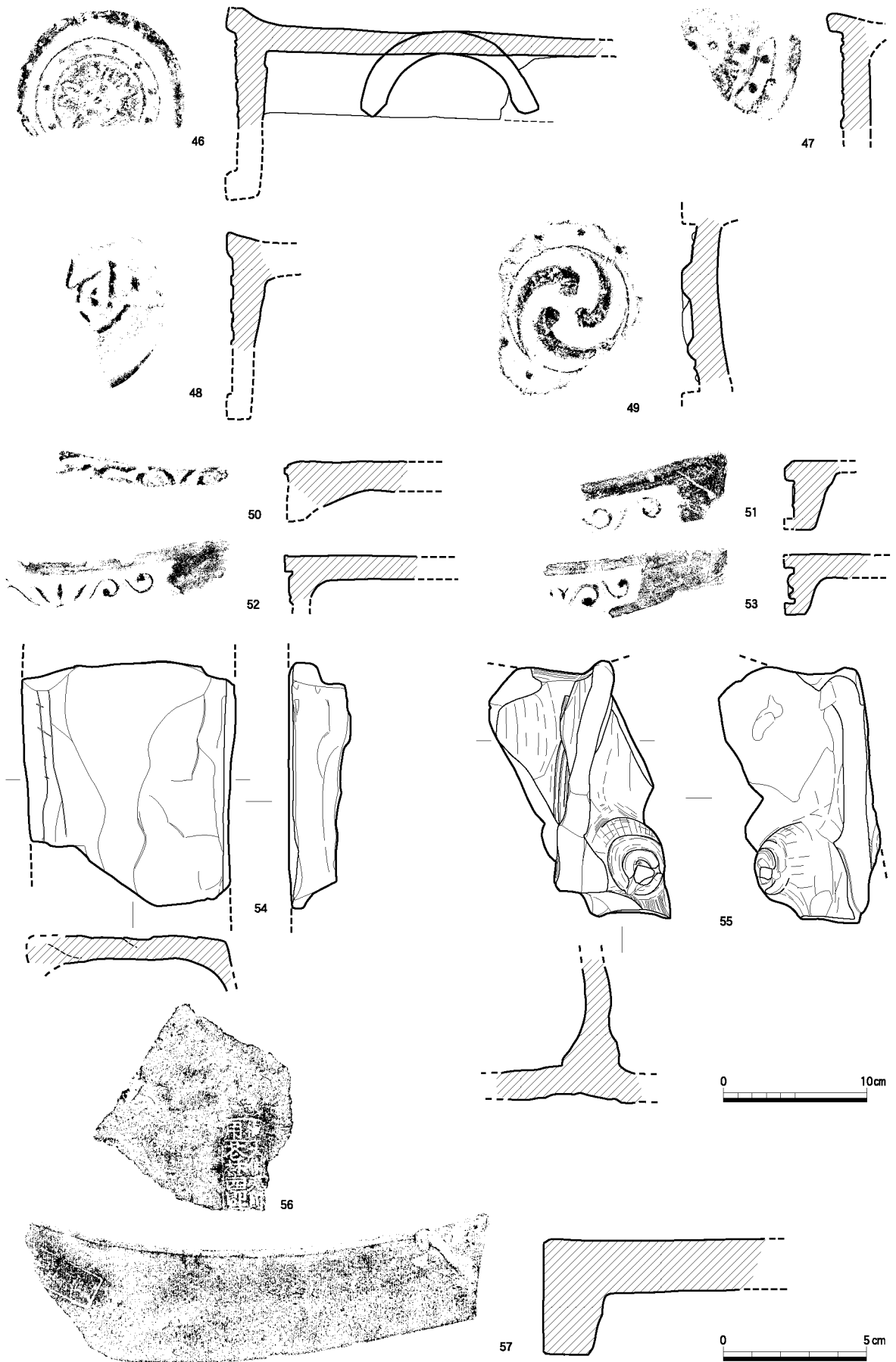


图24 瓦拓影・実測図(1:4、56・57は1:2)

(3) 石製品 (図版17、図25・26、表3)

一石五輪塔、笠塔婆、石塔などの墓石と石臼などがある。

一石五輪塔 (図25、表3) 一石を削り出して五輪塔を製作したものである。5つの部位からなり、下から、地輪・水輪・火輪・風輪・空輪とする。石材の種類はすべて、はんれい岩と呼ばれる火山岩である。19基出土している。完存するものは(61)のみである。遺構別では、土壇67で8基、土壇62で4基が出土しており、他は単体出土である。

大きさには差異があるが、明確な規格性までは言及できない。地輪・水輪・火輪の幅はほぼ同じであるため、地輪の幅をもとに区分すると、幅8～11cm程度が最も多く(15基)、それより大型品では17cmまでに4基がある。

地輪・水輪・火輪・風輪・空輪の成形は、出土遺構や銘文の年代を参考にすると、比較的丸みをもつ状態で削り出されたものが古い形態といえる。それに対し、端部をシャープに削り出すものは新しい形態で、これらは3基ある。(64)のみ土壇67から出土し、他の2基は攪乱や表採品である。表3の備考では(新)とした。

古い形態の一石五輪塔は、地輪の断面形はすべて幅が厚みより広い。これらを詳しくみると、直方体を呈するもの(59・62)と、台形を呈するものがある。さらに台形においては、銘文側が広いもの(58・60)と、狭いもの(61)とがある。

成形はノミで加工し、各面とも平坦面に仕上げる。仕上げは各面ほぼ同程度であるが、(58)のみ銘文側の裏面が粗加工のままである。底面はいずれも割れ面のままであり、平坦面になるまでは加工しない。

銘文は、空輪に「妙」、風輪に「法」、火輪に「蓮」、水輪に「華」、地輪に「経」を刻む。さらに地輪では、向かって右に年号、中央に被葬者の戒名、左に月日が刻まれる。年号は、(58)が「天文」、(59～62)が「天正」である。戒名には女性、子ども、僧侶の名があり、いずれもこの妙泉寺に関係した人物とみられる。このうち法印号をもつ「日撃」なる人物は、妙泉寺境内にあった5つの塔頭の1つ「止静院」の開基に比定できる。

笠塔婆 2基ある。ともに笠部の破片である。

(66)は長さ26.8cm、幅16.7cm、高さ9.9cmある。側面(正面)は唐破風造りとみられるが欠損している。頂部には一段の平坦面があり、その上に蒲鉾形の棟筋を造り出す。この棟筋は中心線より後側に寄っている。正面の唐破風を大きくしたため、棟筋が後方に寄ったのであろう。棟筋から唐破風にかけてもふくらみが連続するが、大半は欠損している。下り棟は勾配に反りがあるが、特別の装飾はない。底部は平坦で、ホゾ穴などの加工はない。底面の成形は粗く、加工時の凹凸を残す。石材は、はんれい岩である。

(67)は長さ25.4cm、幅9.5cm以上、高さ9.5cm以上ある。笠頂部まで残存する、頂部には(66)と同様の平坦面がみられる。下り棟は帯状の高まりを削り残す。高まりの端部に沈線をめぐらせ、2段の高まりのような効果をみせる。下り棟の勾配は反りが強い。底部は平坦でホゾ穴などの加

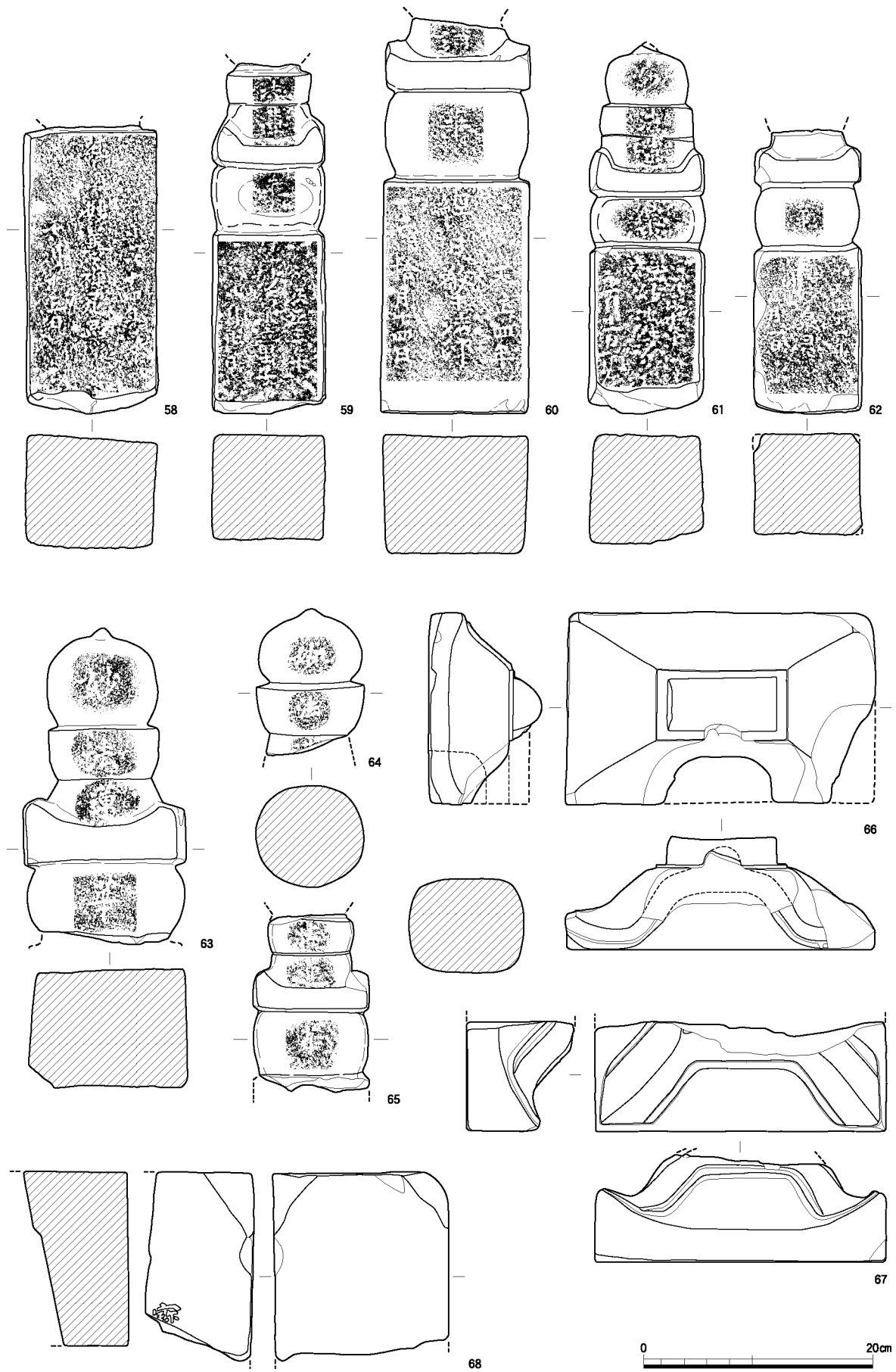


图25 一石五輪塔・笠塔婆・石塔実測図(1:5)

工はない。底面のみ粗加工のみである。石材は砂岩である。

その他の石塔 土壙67から4基出土している。すべて破損品である。(68)は残存長16.4cm、幅9.4cm以上、厚さ15.2cmある。方形を呈し、石柱の一部とみられる。頂部は隅を欠きとり、八面体に仕上げる。正面右下端に「寶」の一字が刻まれる。年号であるなら「寶永」「寶曆」とみられる。石材は砂岩である。11以外も加工面をもつが、全体の形状が不明なため、図示しなかった。

礎石(図26) 移築保存された礎石3基の実測図を、据え付けられていた方位とあわせて、ここに載せておく。

礎石1は、南北約62cm、東西約54cm、厚さ約29cmあり、直径35~36cm、高さ約4cmの円形柱座がつく。礎石2は、風化が激しく不明瞭ではあるが、南北約57cm、東西約58cm、厚さ約28cmあり、直径33cm前後、高さ3~4cmの円形の柱座がつく。礎石5は、南北約86cm、東西約52cm、厚さ約29cmあり、長径約54cm、短径約41cmの平らな面で柱座を作る。裏は中央部が凹む。すべて花崗岩製である。

表3 一石五輪塔一覧表

No.	部 位	規模(残存) cm			銘 文	材質	出土地点	備考
		長	幅	厚				
58	地	(24.7)	11.1	9.2	經 (天保) □文十四年 妙善尼忌 七月十三日	はんれい岩	土壙62	
59	風・火・水・地	(30.4)	9.7	9.0	法蓮華經 天正三年 妙泉童子 八月廿日	はんれい岩	攪乱7	
60	火・水・地	(33.1)	12.6	10.2	蓮華經 天正四年 日撃法印 拾月十四日	はんれい岩	土壙67	
61	空・風・火・水・地	31.7	9.8	9.4	妙法蓮華經 天正十年 妙法忌 十一月十一日	はんれい岩	土壙67	
62	火・水・地	(24.2)	9.3	8.7	華經 天正十一年 妙泉忌 十一月一日	はんれい岩	土壙67	
63	空・風・火・水	(27.5)	13.8	10.8	妙法蓮華	はんれい岩	表採	(新)
64	空・風	(12.5)	9.5	9.2	妙法	はんれい岩	土壙67	(新)
65	風・火・水	(15.3)	10.3	8.9	法蓮華	はんれい岩	土壙62	
	空・風	(13.2)	11.2	11.1	妙法	はんれい岩	攪乱2	(新)
	空・風	(9.9)	7.6	7.2	妙法	はんれい岩	土壙40	
	風・火・水	(14.3)	10.8	9.0	法蓮華	はんれい岩	土壙62	
	空・風	(10.0)	7.7	7.7	法蓮華	はんれい岩	土壙62	
	空・風	(8.1)	7.8	7.6	不明	はんれい岩	掘下げ	
	地	(9.8)	9.1	8.2	不明	はんれい岩	土壙67	
	火・水・地	(20.0)	9.7	7.6	不明	はんれい岩	土壙67	表面磨滅
	火・水	(11.0)	10.2	8.5	蓮華	はんれい岩	掘下げ	
	空・風	(9.7)	8.8	8.5	不明	はんれい岩	黄褐色砂泥	表面磨滅
	空・風・火・水	(12.8)	8.2	7.0	妙法蓮華	はんれい岩	土壙13	
	火	(9.8)	11.4	8.9	不明	はんれい岩	土壙67	

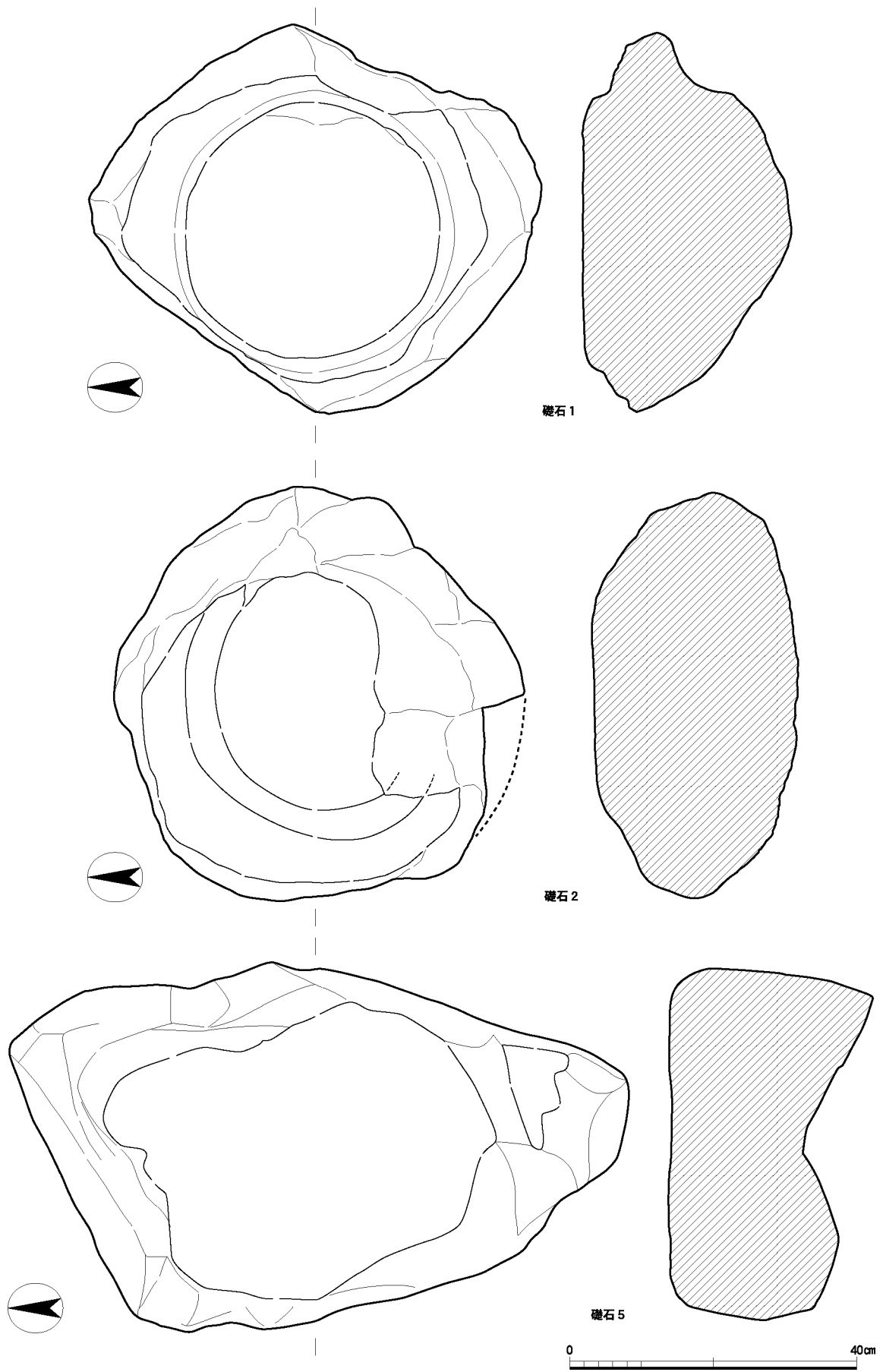


图26 礮石实测图(1:8)

(4) その他の遺物 (図版18、図27~30、表4・5)

銭貨、金属製品、木製品などがある。

銭貨 (図版18-1、図27、表4)

寛永通寶7点が出土した。裏が無文のもの(69~72)と、「文」の一字を配するもの(73~75)とに大別できる。

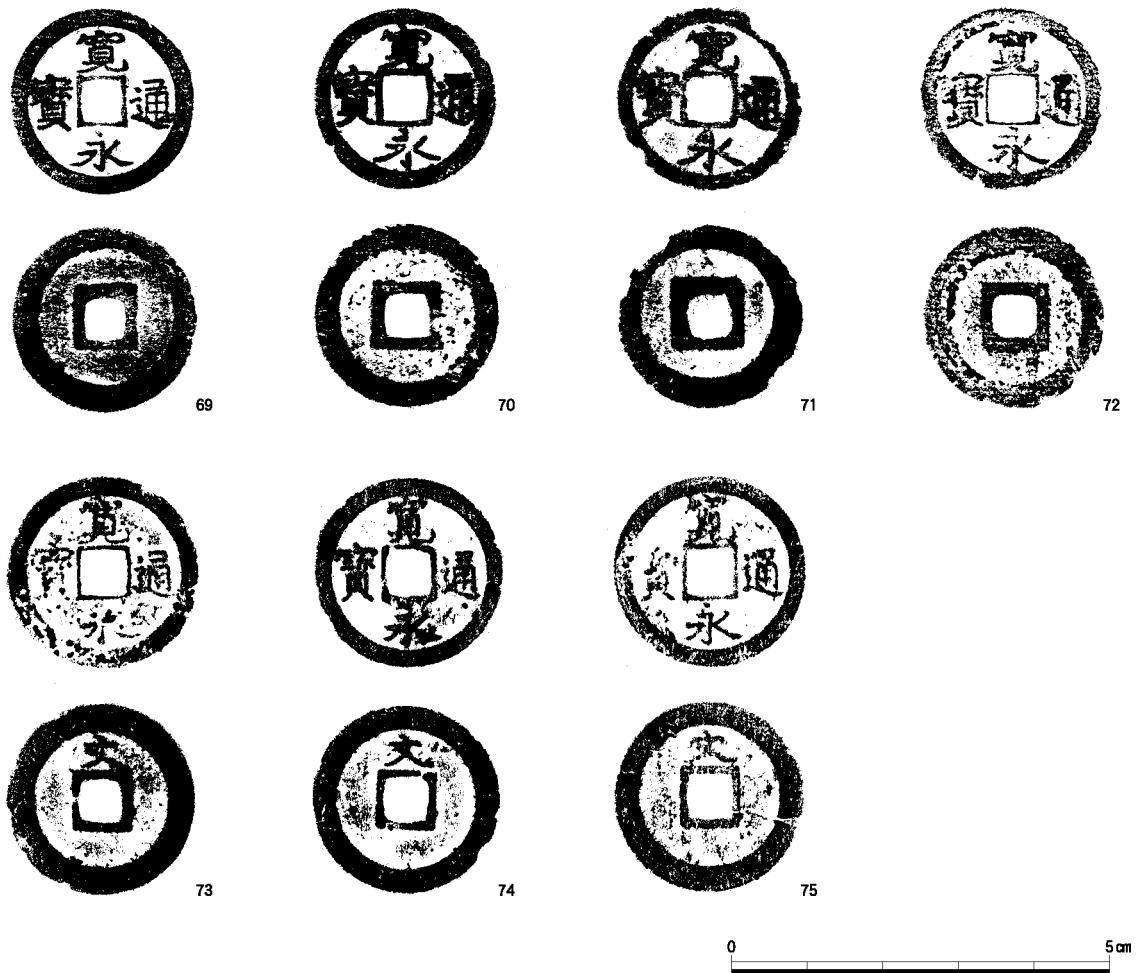


図27 銭貨拓影(1:1)

表4 銭貨一覧表

No.	種類	直径	重量	特徴	出土地点(1区出土)
69	寛永通寶	2.45cm	4.0g	裏面は無銘	中央東部第1層
70	寛永通寶	2.45cm	2.7g	裏面は無銘	中央部北寄り攪乱14
71	寛永通寶	2.45cm	2.0g	裏面は無銘	路面110の上層
72	寛永通寶	2.40cm	3.3g	裏面は無銘	排土から採取
73	寛永通寶	2.50cm	3.0g	裏面に「文」銘あり	中央部北寄り攪乱14
74	寛永通寶	2.50cm	2.6g	裏面に「文」銘あり	中央部第1層
75	寛永通寶	2.55cm	2.6g	裏面に「文」銘あり	南部第1層

金属製品（図版18-2、図28、表5）

金属製品は、約200点が出土した。主に釘である。そのうち約130点が第3面から出土した。それらの中から残存状態が比較的良好な釘と、他の製品について述べる。

（76）は厚さ0.4cm、幅1.0cmの板状のものが環状をなし、端は繋がらない。鞘金具か。（77）は先端部が折れ曲がる。鋸か。（78～84）は釘である。その内（78～81）は釘の先端部あるいは先端部に近い部位で、鍛練した痕跡が見られる。（78）は内部に直径1～2mmの空洞がある。（81）は断面が扁平である。（82～84）は幅1cm弱の大きめの釘である。固まって一体化した状態で出土した。（82・84）は頭部が残る。（83）は先端部が残る。

（85）は外径4.3～4.4cm、内径3.5～3.6cm、直径約4mmの環状銅製品である。接合部は溶接している。重量は14.3gである。墓83に納められていた。袈裟の吊金具か。

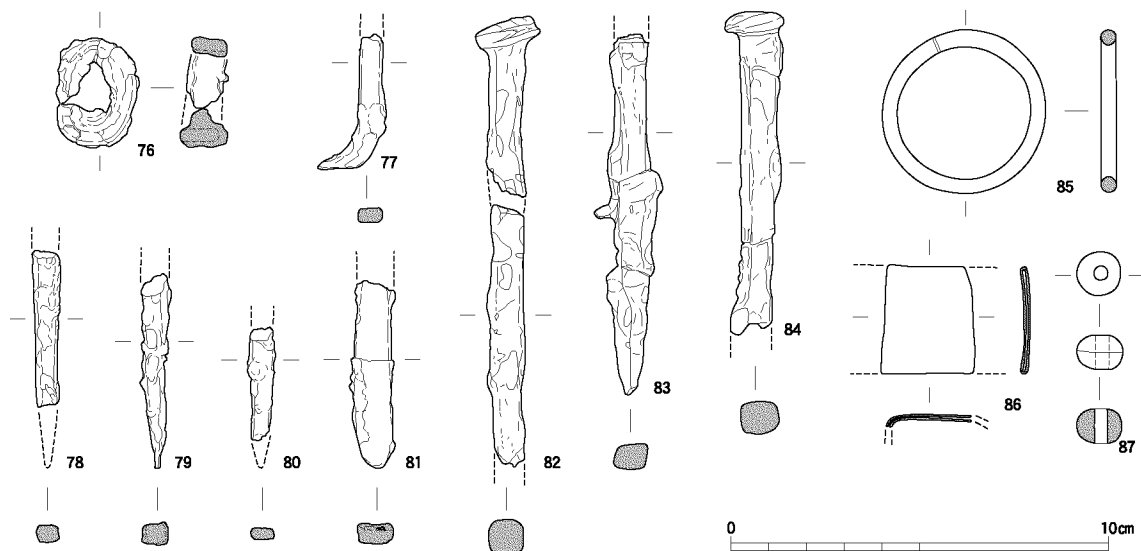


図28 金属製品実測図（1：2）

表5 釘類他一覧表

No	種類	重量	特徴	出土地点（1区出土）
76	鞘金具？	5.7g	長径2.8cm、短径2.2cmの楕円形、内径1.2～1.5cm	土壙161
77	鋸？	3.5g	残存長3.5cm、断面幅0.6cm、厚さ0.4cm	礎石建物西縁整地層
78	釘	3.2g	残存長4.0cm、断面幅0.6cm、厚さ0.4cm	礎石3・6間
79	釘	4.7g	残存長5.2cm、断面幅0.5cm、厚さ0.6cm	掘付穴143
80	釘	1.3g	残存長3.0cm、断面幅0.6cm、厚さ0.3cm	石列162・163間
81	釘	2.6g	残存長5.0cm、断面幅1.0cm、厚さ0.5cm 板状に捲く	土壙161
82	釘	10.1g 12.0g	残存長上部4.8cm、下部6.9cm、頭部直径1.5cm×1.7cm の楕円形で、厚さ0.5～0.7cm、断面0.9cm×0.9cm	雨落溝内
83	釘	17.4g	残存長9.5cm、断面幅1.0cm、厚さ0.7cm	雨落溝内
84	釘	23.0g	残存長8.5cm、断面幅1.0cm、厚さ0.9cm	雨落溝内

(86)は長さ約2.5cm、幅約3cm、重量4.8gの真鍮製品である。管が潰れたもので、原形は直径約1.8cmとなる。溝82埋土底部から出土した。

(87)は直径1.2cm前後、厚さ1cm前後の銅玉で、中央に直径3～4mmの穴がある。また外面の横中央に幅約1mmの筋が巡る。鑄造の痕跡の可能性はある。重量は2.3gである。道路110から出土した。

木製品(図29・30)

(88・89)は曲物の底板である。土壌202と201から出土した。(89)は側面に目釘の痕跡が認められる。

(90・91)は漆器椀である。(90)は直径約8cmの底部高台部分のみ残る。黒漆を塗る。内面に赤漆で描いた文様と思われる部分が一部残る。池206から出土した。(91)は直径約6cmの高台と体部がわずかに残る。内面は赤漆、外面は黒漆を塗り、赤漆の文様と思われる部分が一部残る。また底部裏に赤漆で「」を線で描く。溝82埋土下層から出土した。

(92)は板状の両面を削り、クサビ状に加工したものである。土壌202から出土した。

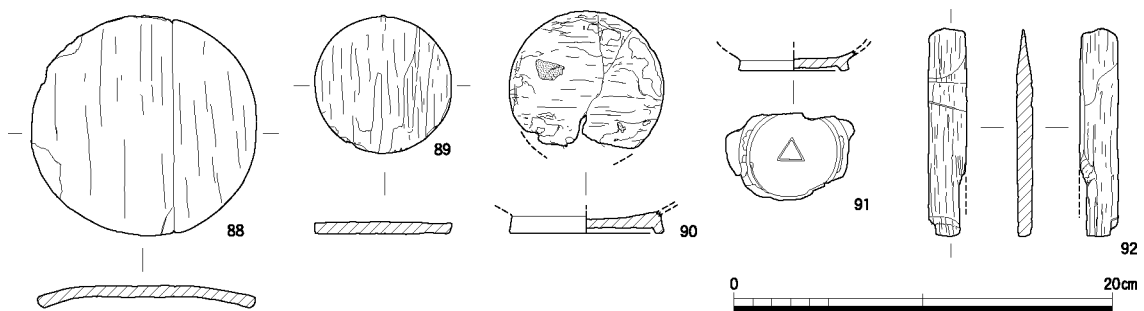


図29 木製品実測図(1:4)

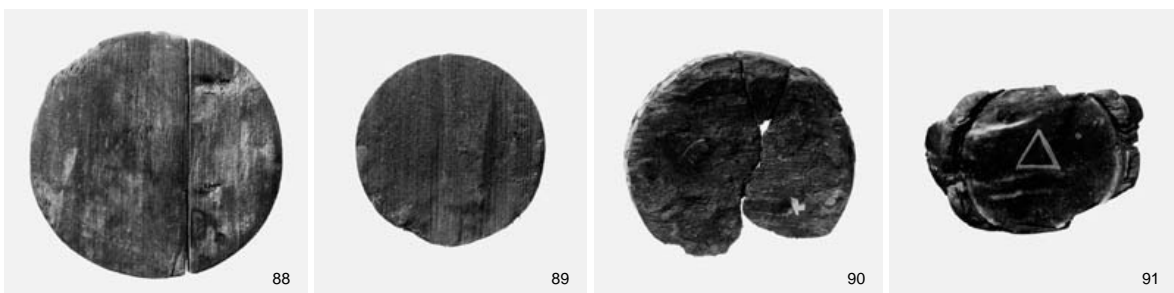


図30 木製品

5.まとめ

ここでは、年代に沿って述べていく。

礎石建物以前

遺構としては検出しなかったが、縄文時代、古墳時代そして平安時代の遺物が出土したことから、礎石建物以前にも、この地で人の営みがあったことが窺える。さらに平安時代前期の軒丸瓦⁷⁾(図31・32)が1点採取されている。この軒丸瓦は、松ヶ崎寺の創建年代を考える上で重要な資料である。

礎石建物と庭園遺構(図33)

松ヶ崎廃寺跡の調査において、今回初めて礎石建物や庭園遺構を発見した。建物跡は、残念ながら北西部の一部を確認したにとどまったが、建立時期については平安時代中期末から後期であることを確定した。また、建物の造営にあたっては、北側に位置する山麓を部分的に開削し、建築に必要な平坦面を造成していることを確認した。

一方、庭園遺構については、新旧が認められたが、いずれも極めて緩やかな池の汀であったことを明らかにした。この池は、人工的に開削したのではなく、山裾のすぐ南側にあった自然の池に一部手を加え、園池として利用したものと考えられる。

すなわちこうした状況は、山裾を開削してまでも、この場所に建物と園池を造営したいとの思いが強かったことを物語っている。

今回検出した礎石建物や園池は、遺構の年代や文献史料などから、源保光が正暦三年(992)に供養した松ヶ崎寺の一角になる可能性が極めて高い。

最後に、松ヶ崎小学校の敷地北側に見られる山裾の崖面は、人工的な掘削面の跡であり、平安時代まで遡る可能性が極めて高いと思われる。

礎石建物以後

調査では、礎石建物や庭園遺構を覆う厚い整地層の上面で、室町時代後期から江戸時代の遺構である溝、道路、墓などを検出したが、2次調査で検出した石垣(図34)は、その整地層の先端部に積まれたものであると思われる。また各時代の溝を検出したが、山際の湧水の処理に苦労し

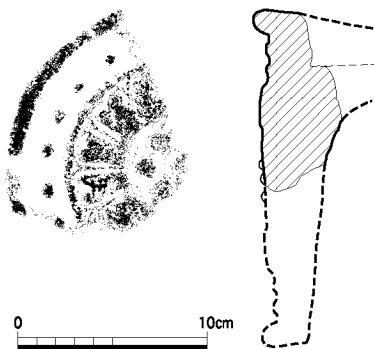


図31 調査区西隣採取軒丸瓦
拓影・実測図(1:4)

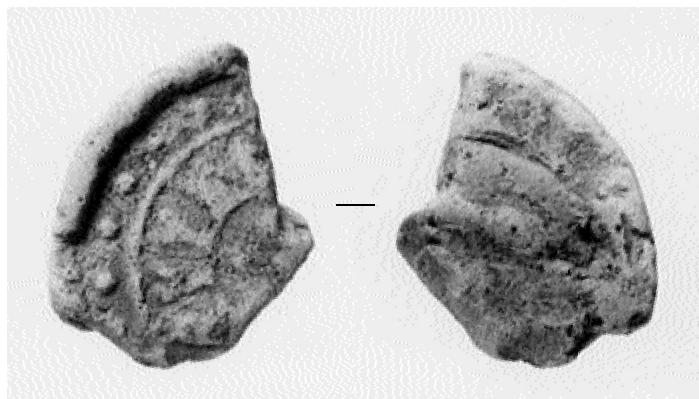


図32 調査区西隣採取軒丸瓦

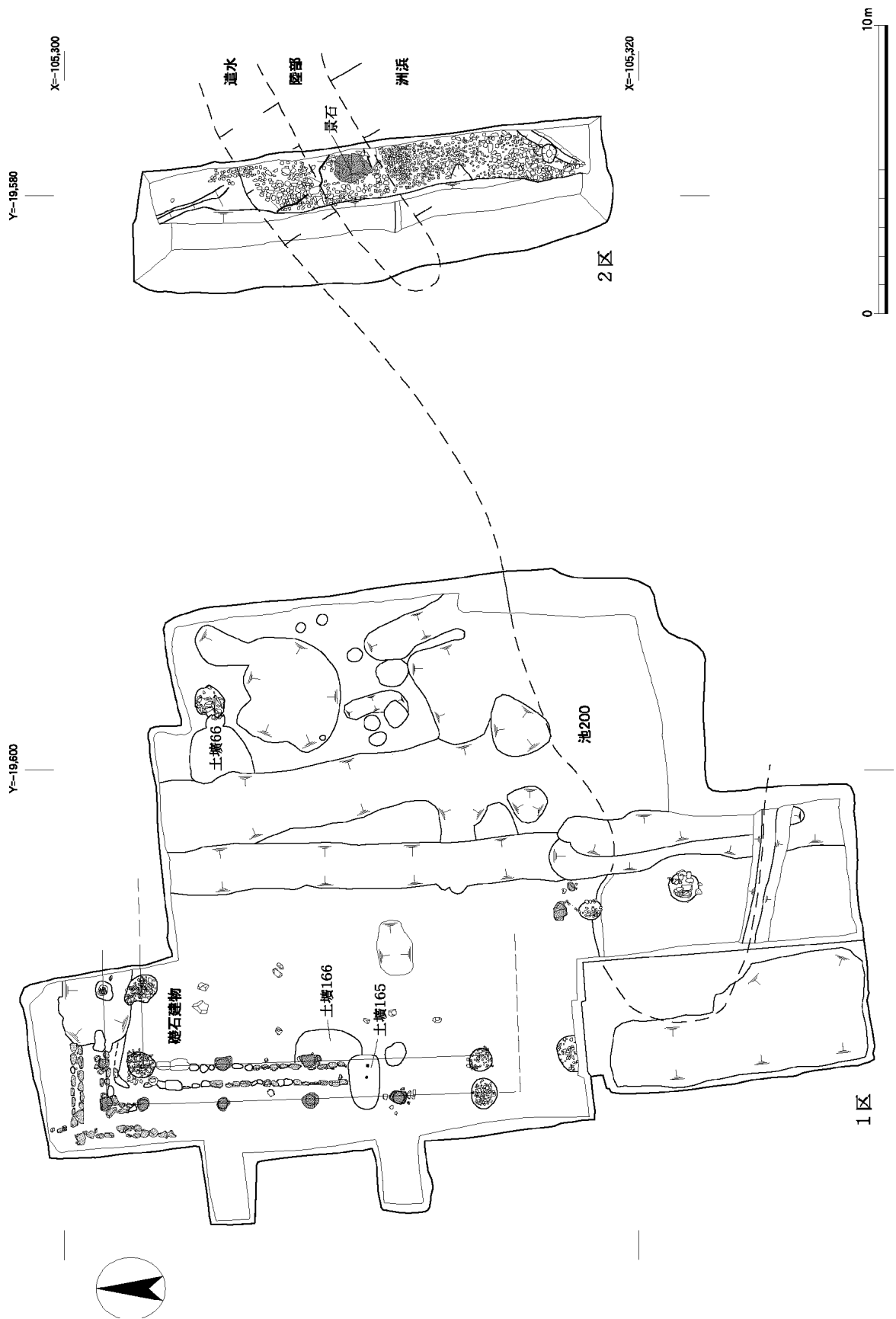


図33 礎石建物と庭園遺構 (1 : 200)

た様子が窺える。さらに江戸時代の妙泉寺近辺の様子を窺えるものに後述の絵図（図35～37）や『都名所図会』六巻「松ヶ崎」⁸⁾（図38）がある。『都名所図会』には、妙泉寺と松ヶ崎村が見える。山中には月輪、日輪の滝を持つ七面宮（七面祠として現存している。）と参道が描かれ、今回の調査地は妙泉寺と七面宮参道の間位置することがわかる。付章で詳述するが、さらに調査地は「絵図」から石塔堂のあった付近に比定できる。このように、再興以降の妙泉寺に関する遺構が発見されたことも今回の調査の成果の一つである。

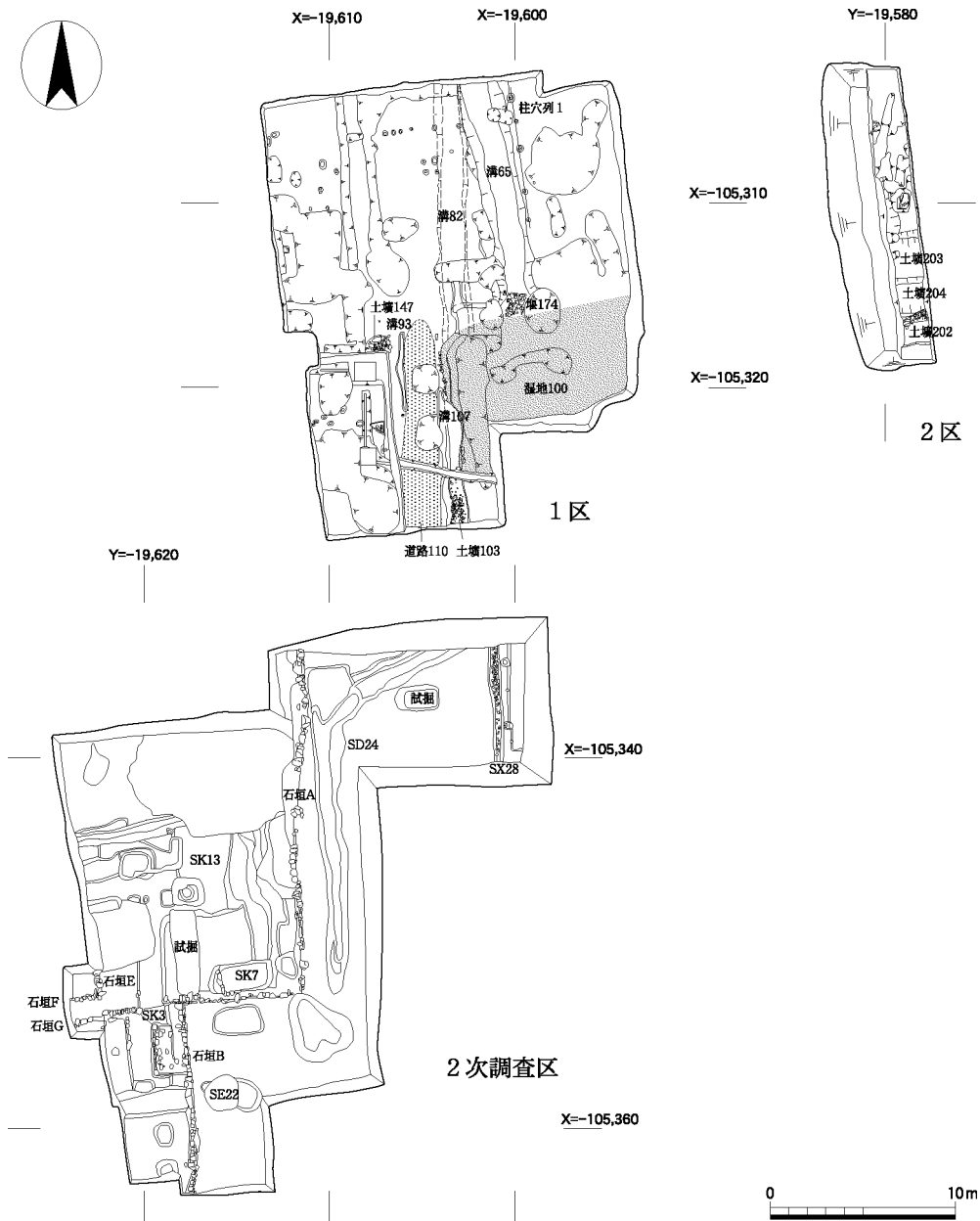


図34 2次調査と1区第2面および2区第1面遺構図（1：400）

6 . 付章 妙泉寺絵図について

本調査中において、松ヶ崎堀町在住の岩崎皓氏より江戸時代の妙泉寺境内の配置を描いた絵図の存在を教示いただき、写真撮影、並びに複写させていただくことができた。これらの絵図は江戸時代の妙泉寺の配置を知る上で極めて重要なものであり、調査成果の評価とも密接に関連するものであるため、この場で紹介し、それぞれの特徴を整理しておく。また合わせて、調査で検出した遺構との関連性についても言及する。

岩崎氏からご教示いただいた絵図は以下である。

- 1 . 「寛政元年（1789） 妙泉寺絵図」(図35)
- 2 . 「天保十四年（1843） 妙泉寺絵図」(図36)
- 3 . 「嘉永三年（1850） 妙泉寺絵図」(図37)

皓氏によると、これらの絵図は実父である岩崎治一郎氏（1899～1987）が、昭和42年頃に涌泉寺に保管されていた絵図を元図として、その上に半透明の硫酸紙をあて、筆でトレースされたものであること、直線は定規で引いているが文字については、元図をそのまま写したものと本人の筆跡が混じっていること、昭和42年当時は明治期に青少年期を過ごされ昭和6年の京都市編入期に松ヶ崎村の運営にあたってこられた方々の間に村の歴史を記録しようとする機運が高まり、その作業の一環として実施されたこと、などであった。

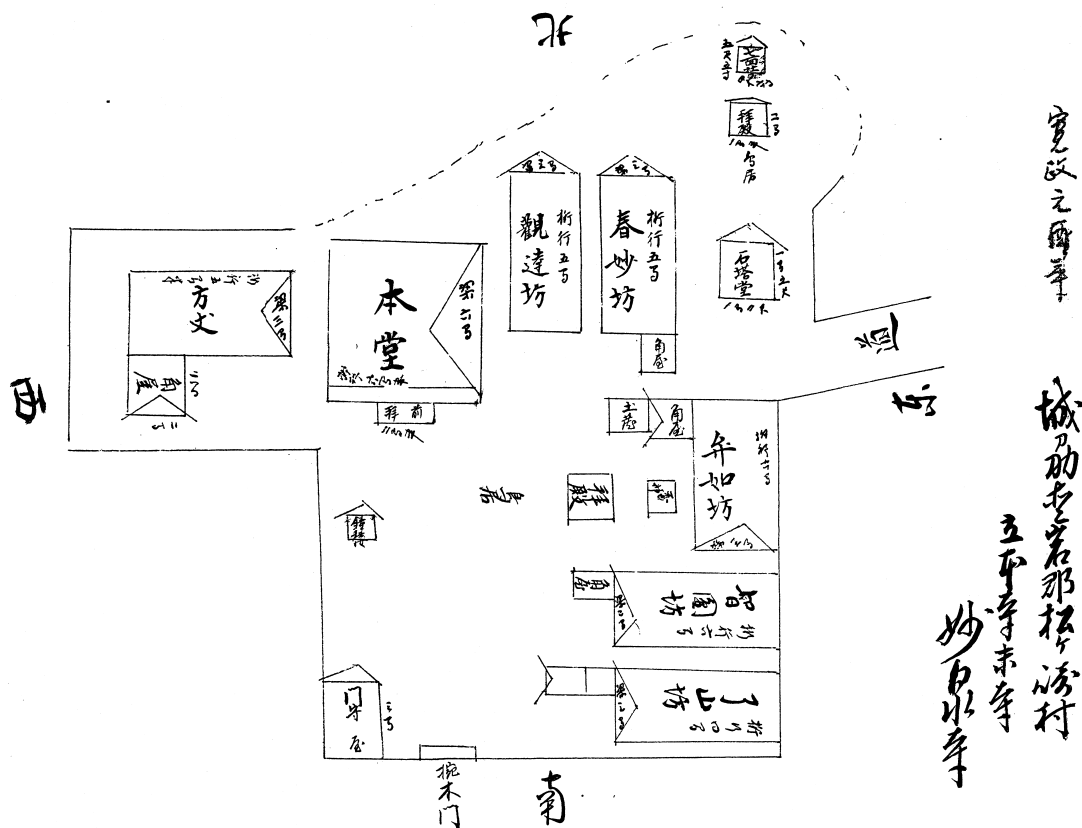


図35 「寛政元年 妙泉寺絵図」(岩崎皓氏所蔵) 寛政元西年の題字を10cm内側に移動させ40%縮小した。

以下、1から3の順に絵図の細部を概説する。

1. 「寛政元年 妙泉寺絵図」(図35) 横35cm×縦27cm(文字含む)

寛政元酉年

城乃州愛宕郡松ヶ崎村 立本寺末寺 妙泉寺

1. 七面社(西面に五尺五寸、南面に四尺六寸、北面に妻、南北棟)
2. 拝殿(南面に一間半、東面に二間、北面に妻、南北棟)
3. 鳥居(文字のみ)
4. 石塔堂(南面に一間二尺、東面に一間五尺、北面に妻、南北棟)
5. 春妙坊(東面に桁行五間、北面に梁三間、北面に妻、南北棟)
6. 角屋
7. 観達坊(東面に桁行五間、北面に梁三間、北面に妻、南北棟)
8. 本堂(南面に桁行六間半、東面に梁六間、南面に縁、東面に妻、東西棟、南側に拝前、南面に二間半)
9. 方丈(北面に桁行五間半、東面に梁三間、東面に妻、東西棟)
10. 角屋(東面に二間、南面に二間、南面に妻、南北棟)
11. 弁如坊(東面に桁行六間、南面に梁三間、南面に妻、南北棟)
12. 角屋(西面に妻、東西棟)
13. 土蔵
14. 番神
15. 拝殿
16. 鳥居(文字のみ)
17. 智園坊(南面に桁行六間、西面に梁三間、西面に妻、東西棟)
18. 角屋
19. 了山坊(南面に桁行四間、西面に梁三間、西面に妻、東西棟)
20. (東西棟2区画、名称未記入、西面に妻、東西棟)
21. 椀木門(東西棟)
22. 門守屋(東面に三間、北面に妻、南北棟)
23. 鐘楼(北面に妻、南北棟)

北を上を描く。区画内に23の建物を配置する。各建物は妻を描くことで棟の方向を示す。規模は間数と寸法で示す。文字は北向きと東向き2方向のみである。東・西・南・北・道は中心方向を向く。塔頭は「坊」で表示する。

2. 「天保十四年 妙泉寺絵図」(図36) 横39cm×縦30.5cm(文字含む)

天保十四年十二月

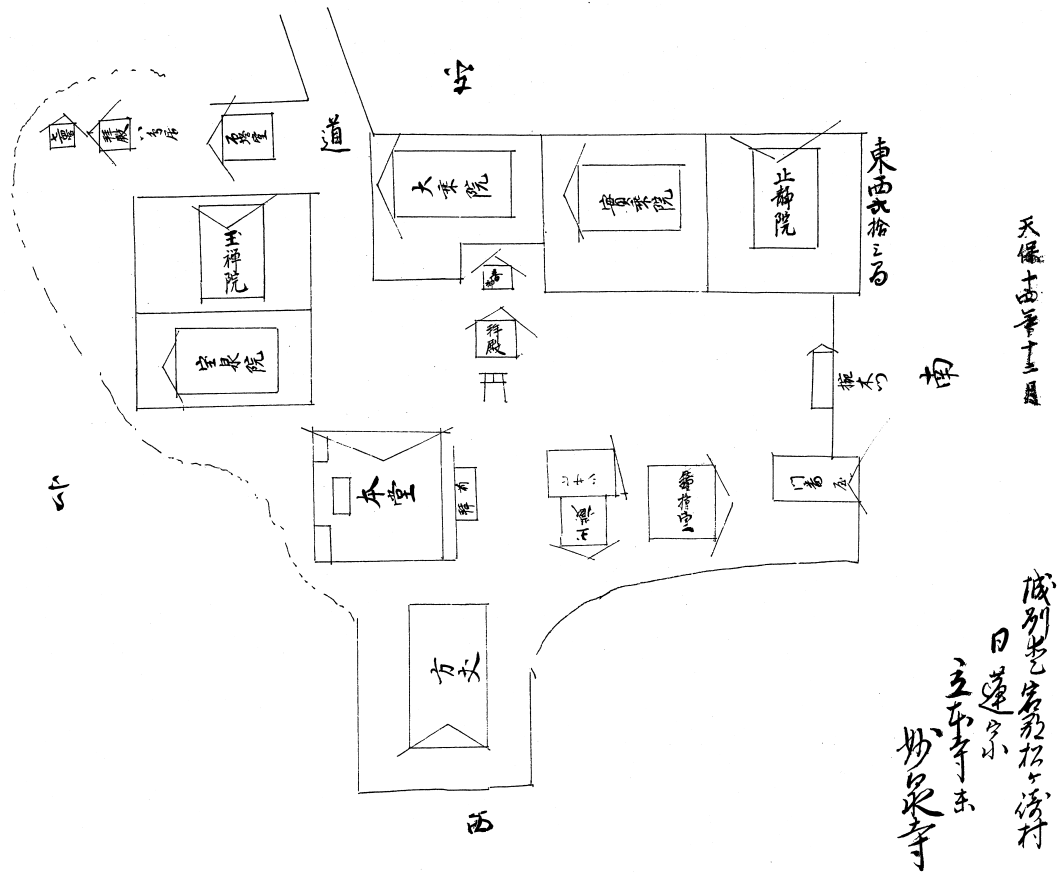


図36 「天保十四年 妙泉寺絵図」(岩崎皓氏所蔵) 天保十四年十二月の題字を3.5cm内側に移動させ35%縮小した。

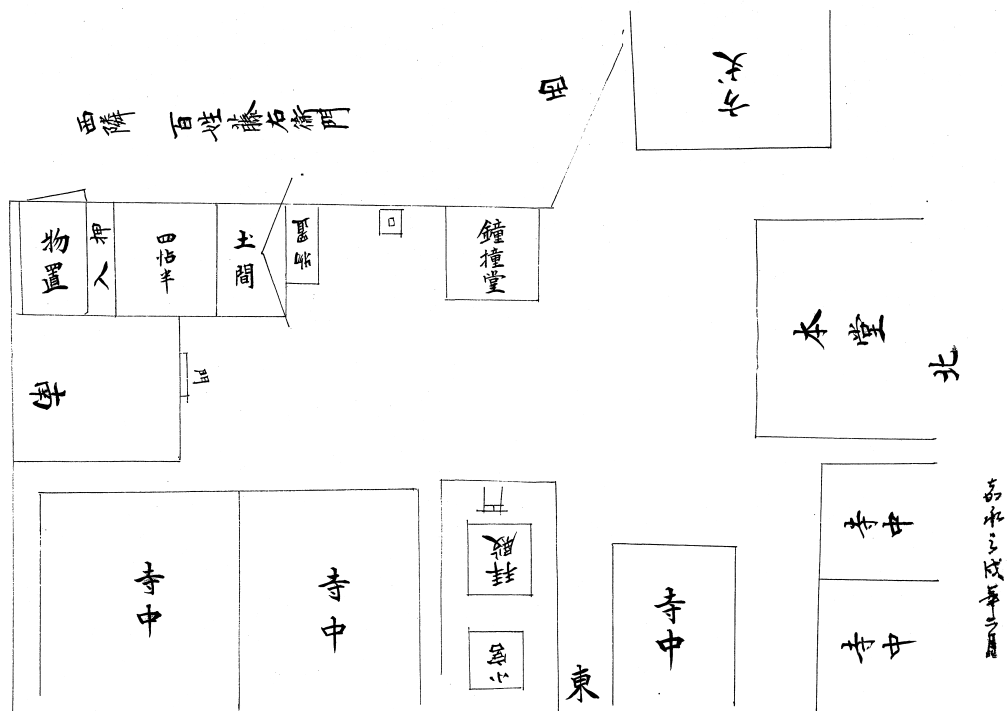


図37 「嘉永三年 妙泉寺絵図」(岩崎皓氏所蔵) 嘉永三戊年二月の題字を10cm内側に移動させ30%縮小した。

城州愛宕郡松ヶ崎村 日蓮宗 立本寺末 妙泉寺

南面に 東西貳拾三間

1. 七面宮（東面に妻、東西棟）
2. 拝殿（北面に妻、南北棟）
3. ^[小切]鳥居（文字のみ）
4. 石塔堂（北面に妻、南北棟）
5. 玉禅院（東面に妻、東西棟）
6. 宝泉院（北面に妻、南北棟）
7. 本堂（北半の中央・北東隅・北西隅に小区画、南面に縁、東面に妻、東西棟、南側に拝前）
8. 方丈（西面に妻、東西棟）
9. 大乘院（北面に妻、南北棟）
10. 番神（東面に妻、東西棟）
11. 拝殿（東面に妻、東西棟）
12. 鳥居（絵のみ、東面）
13. 実乗院（北面に妻、南北棟）
14. 止静院（東面に妻、東西棟）
15. 椀木門（東面に妻、東西棟）
16. 門番屋（南面に妻、南北棟）
17. 鐘撞堂（南面に妻、南北棟）
18. 土蔵（西面に妻、東西棟）
19. ヒサシ（南面に庇風、東面）

東を上を描く。区画内に19の建物を配置する。各建物では、妻は描くが規模の表示はない。ヒサシの南面のみ半開きの表現がある。庇がかかる状況を示すのであろう。番神、拝殿、椀木門は妻を描く。これは先の絵図にはない。文字は北向き・東向き・西向き3方向がある。東・西・南・北は中心を向くが、道のみは外を向く。塔頭は「院」で表示される。各塔頭は線で囲まれ、玉禅院と宝泉院、大乘院と実乗院と止静院でひとまとめとなる。七面宮は東西棟、実乗院は南北棟となる。南辺の長さが23間（1.95mとして44.85m）と判明する。先の寛政絵図と共通した図法で描かれるが、細部で異なる点も見られる。

3. 「嘉永三年 妙泉寺絵図」(図37) 横41.5cm×縦31cm(文字含む)

嘉永三戌年二月

西面に 西隣 百姓藤右衛門

1. 寺中
2. 寺中
3. 本堂

- 4 . 方丈
- 5 . 寺中
- 6 . 小宮
- 7 . 拝殿
- 8 . 鳥居 (絵のみ、東面)
- 9 . 寺中
- 10 . 寺中
- 11 . 門
- 12 . 物置 (西面に庇風、南面)
- 13 . 押入
- 14 . 四帖半
- 15 . 土間 (北面に妻、南北棟)
- 16 . 物置
- 17 . (方形区画、名称未記入)
- 18 . 鐘撞堂

表6 妙泉寺絵図一覧表

「寛政元年 妙泉寺絵図」		「天保十四年 妙泉寺絵図」		「嘉永三年 妙泉寺絵図」	
題字方向	題字内容	題字方向	題字内容	題字方向	題字内容
北向	七面社	北向	七面宮		
北向	拝殿	北向	拝殿		
北向	鳥居	北向	鳥居		
北向	石塔堂	北向	石塔堂		
北向	春妙坊 角屋	東向	玉禅院	南向	寺中
北向	観達坊	北向	宝泉院	南向	寺中
北向	本堂 拝前	北向	本堂 拝前	南向	本堂
北向	方丈 角屋 (東向)	北向	方丈	東向	方丈
北向	弁如坊 角屋 土蔵	北向	大乘院	西向	寺中
東向	番神	東向	番神	東向	小宮
東向	拝殿	東向	拝殿	東向	拝殿
東向	鳥居	東向	鳥居 (絵のみ)	東向	鳥居 (絵のみ)
東向	智園坊 角屋	北向	実乘院	西向	寺中
東向	了山坊 (未記入)	東向	止静院	西向	寺中
北向	椀木門	北向	椀木門	北向	門
北向	門守屋	北向	門番屋	西向	物置 押入 (南向)
		西向	土蔵 ヒサシ		
北向	鐘楼	東向	鐘撞堂	西向	鐘撞堂
				西向	四帖半 土間 物置 (東向)
		東向	東西貳拾三間	南向	西隣 百姓藤右衛門
北向	寛政元酉年 城乃州愛宕郡松ヶ崎村 立本寺末寺 妙泉寺	東向	天保十四年十二月 城州愛宕郡松ヶ崎村 日蓮宗 立本寺末 妙泉寺	西向	嘉永三戊年二月
横35cm×縦27cm (文字を含む)		横39cm×縦30.5cm (文字を含む)		横41.5cm×縦31cm (文字を含む)	

西を上を描く。区画内に18の建物を描く。七面宮、拝殿、鳥居、石塔堂は省略される。妻の表現は省かれる。棟方向は不明であるが、文字の方向が棟方向を示すとみられる。土間の北面のみ唯一、妻の表現がある。物置まで一連の南北棟とみられる。物置の西面に庇風の表現がある。塔頭は個別名を載せず、単に「寺中」とする。文字は東向き・西向き・南向きがほぼ同数、北向きは1例のみである。東・西・南・北は中心を向く。北東の2つの寺中、小宮と拝殿と鳥居、東面の2つの寺中、西面の物置から物置まで5区画は、それぞれ線で囲まれる。南面の門は北に入り込んだ位置に描かれる。西面の門守屋から鐘楼までの箇所には5区画が集中する。天保絵図では北から土間、鐘撞堂であったが、この絵図では鐘撞堂、土間となる。番神が小宮、椀木門は単に門となる。この絵図は、先の2枚とは別系統の図法で製作されている。

江戸時代地誌との比較 江戸時代の地誌類では、安永九年（1780）製作による『都名所図会』巻六に、松ヶ崎村と妙泉寺、本涌寺などを描いた景観図がある。そこに描かれた妙泉寺の配置は、以上みてきた絵図での寺内の配置に共通する（図38）。『都名所図会』にある妙泉寺では、東西の道から北に入り込んだ位置に門（絵図では椀木門）がある。ただし、門の両側には集落の家並みが描かれており、この状況は3枚の絵図とは一致しない。門の右手（北東）には築地塀がめぐり、内部に東西棟（実乗院か）と南北棟（止静院か）がある。その棟方向は天保絵図とは逆の関係である。門の正面（北）には階段があり、その左手（西）に鐘楼と南北棟がある。南北棟は天保絵図にある土蔵に該当するとみられる。階段正面に本堂がある。東西棟であり南に向背（絵図では拝殿）をもつ。階段の右（東）には東面して鳥居があり、その奥に2棟の小建物、拝殿と番神がある。



図38 「松ヶ崎」『都名所図会』

ある。その北東に建物がある。大乘院であろう。さらに北東に南北棟がある。配置からみて宝泉院とみられる。背後の山腹には月輪瀧、日輪瀧の書き込みがあり、中腹に拝殿と七面宮の建物が描かれる。

この『都名所図会』にある場面は、年代的には寛政元年（1789）の絵図と同時期である。建物数は省略されているものの、基本的な配置は絵図と共通しており、実際に現地の景観を観察しながら作成したことは確かであろう。

松ヶ崎小学校敷地との関係 また岩崎氏は、明治13年作成の山城国愛宕郡第四組松ヶ崎村図（縮尺1/600）から、現在の松ヶ崎小学校図と江戸時代の妙泉寺の関係を考証されている。妙泉寺境内を描いた絵図は概略図であるため、そのままでは現地に建物配置を示すことはできない。

しかし明治13年作成の1/600地図を介在させることで、妙泉寺絵図と学校敷地との関係を考証することが可能となる。検討の結果、妙泉寺絵図と学校敷地は大概で一致することが明らかとなり、今回の調査地は敷地の北東部、絵図にある石塔堂付近にあたることが判明した。そして、調査区の東半では七面宮に至る参道が含まれるが遺構としては検出できていないこと、北西部で柱穴群を検出したものが石塔堂を囲む区画と思われること、その南で検出した道路110が石塔堂への参道であること、路面の東端で検出した墓の骨壺は石塔の底部に設置されたものとみられること、この参道は南門から入ると本堂・拝殿間を経て東門へ至る寺内の通路から分岐した一部であること、などが新たに判明した。

明治8年に妙泉寺と5つの塔頭は小学校の開校を目的として合併する。ついで大正7年には妙泉寺と本涌寺が合併し、大正9年には本堂、鐘楼、梵鐘などが売却され小学校の敷地となった⁹⁾。そうした経過はすでに知られている通りであるが、今回紹介いただいた絵図を活用することで、松ヶ崎妙泉寺のより具体的な変遷が追跡できるようになった。その意義は大きなものがあり、資料を提供していただいた岩崎皓氏には、深く謝意を表すものである。

註

- 1) 「法花衆打廻、卯刻松ヶ崎城落ちる」『鹿苑日録』天文七年七月二十二日の条、『京都市の地名』平凡社 1979年 P118・左京区「涌泉寺」
- 2) 当研究所内部資料による。
- 3) 「松ヶ崎廃寺」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) (46)は『栗栖野瓦窯発掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年 P35「図24の21」、(47)は『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 瓦番号56と同範か。
- 6) 『栗栖野瓦窯発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年 図版13の5と同文か。
- 7) 松ヶ崎小学校児童、丸住芽衣さんが、調査地西隣の北校舎北側ドライエリア排水溝の堆積土の中から採取した。平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年、西賀茂角社東群瓦窯の軒丸瓦57・58と同範である。
- 8) 「松ヶ崎」『都名所図会』『新修京都叢書』第6巻 臨川書店 1967年
- 9) 『松ヶ崎』(財)松ヶ崎立正会 2000年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	まつがさきはいじあと
書名	松ヶ崎廃寺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報
シリーズ番号	2003-10
編著者名	布川豊治・丸川義広
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつがさきはいじあと 松ヶ崎廃寺跡	きょうとしさきょうく 京都市左京区 まつがさきほりまち 松ヶ崎堀町40	26100	381	35度 03分 01秒	135度 47分 06秒	2003年7月 1日～2003 年12月26日	800m ²	増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ヶ崎廃寺跡	寺院跡	縄文時代 ・古墳時代		縄文土器 ・須恵器・土師器	平安時代後期から 江戸時代の松ヶ崎 廃寺跡（妙泉寺を 含む）の遺構を検 出した。
		平安時代 ～室町時代	礎石建物・庭園遺 構（遣水、洲浜、 景石）・池	土師器・黒色土器・白 色土器・瓦器・須恵器 ・灰釉陶器・緑釉陶器 ・施釉陶器・焼締陶器 ・輸入陶磁器・瓦類・ 木製品・金属製品	
		桃山時代 ～江戸時代	土壇・柱穴・溝・ 石組溝・集石遺構 ・湿地状遺構・墓 ・道路	土師器・土製品・施釉 陶器・焼締陶器・磁器 ・瓦類・木製品・金属 製品・石製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-10

松ヶ崎廃寺跡

発行日 2004年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961